
誰力為ニ、華ハ薰ル

椿屋カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰力為一、華ハ薰ル

【NZコード】

N7262Y

【作者名】

椿屋カヲル

【あらすじ】

大正9年 帝都

財閥令嬢、二階堂櫻子の住む自宅の屋敷では、華やかな夜会が開かれた。

あなたのチョイスで主人公の運命が変わります。序章の後は、お好みの選択肢（男性キャラ）に進んでください。他サイトで投稿中の同名小説のR15版です。

大正9年（1920年）春

雲の無い天には、星も無く、細くて明るい月が浮かんでいる。

下界のある場所で、真っ盛りという状態の櫻の木があった。それは、月光を吸う度に、神秘的な雰囲気を撒き散らすがごとく、花びらをさらさらと舞わせていた。

その美しいような、妖しいような櫻の下で、一人の男が寝転んでいる。

手を胸のあたりで組んで、まるで瞑想でもしているかのように、瞼を閉じたままだった。

辺りは音もない風が吹く闇夜で、あるのはほんのりとした櫻と土のにおいだけ。

残りは、その額や、頬に、花びらが積もつていく感触だけが、男の世界の全てである。

「これが、おまえなんだね。」

男は、自分の手のひらに積もった花びらを握り締めて、顔に近づけてその匂いを吸つた。

どこか懐かしいような、清廉な香気に陶酔する。

「この大木の中の筋を通つて、綺麗な桜の花となつて、こうして俺の元に降り注いでくれているんだね。」

夢見るよじに、つぶやいている。

しかし、櫻は何も語りかけることもなく、ただただ、見事な花弁を散らしていた。

夜明けには、男の姿は何処にも無かつた。

その数日後、この櫻の木の根元で、死体が埋められているのを、近所の住民が発見した。

随分昔から土の中にあつたらしいそれは、すっかり白骨化していった。しかし、警察が、掘り起こして確認すると、その骸骨には頭の部分がなかつた。

辺りを掘り起こして搜索しても、髑髏は、終に発見されなかつた。

登場人物ノ紹介

にかいじゅう さくらこ
一階堂 櫻子

財閥の娘。仏蘭西の血が混じっている

女学校の国語教師

にかいじゅう とうま
一階堂 桃真

母方のいとこ。養子となり、櫻子の兄。

帝国陸軍少佐。

にれざき れんいち
榆崎蓮一

海外に人脉を持つ榆崎商会の社長。

一代で身を起こした成金で外国語に堪能。

関東出身だが、神戸で会社を興し帝都に本社を移した。

関西の商人の話し方の影響を受けている為、独特の話し方をする。

きょうじゅく きくや
京極菊弥

御典医の家柄で関西出身。現在は、陸軍医。

一階堂家とは懇意であり、櫻子とは幼馴染。

一階堂家から帝都の大学に通い、卒業。

さいき はぎと
斎木萩人

二階堂家の家令。

澳大利の血を半分受け継いでいる。灰色の瞳を持つ。

一階堂家の書生として、音楽大学の学生となる。

留学先の独逸で海難事故により、指を痛めて帰国。

神谷 藤隆
かみや ふじたか

若いが優秀な梅造の秘書の一人。
破産した神谷洋装店の御曹司だった。

春日玲子
かすが れいこ

春日財閥の長女。櫻子の親友。

日本人形のような容姿で、穏やかな性格だが、かなり天然。

春日葵
かすが あおい

玲子の弟

頭脳明晰で容姿端麗。

時々、女性に間違われる。

一階堂 梅造
にかいどう うめぞう

一階堂園子（故人）
にかいどう そのこ

一階堂財閥の総理事長、一階堂家の当主。

冬馬撫子
とうま なでこ

二階堂家の長女で、櫻子の姉。
若手官僚に嫁ぎ、現在は夫の洋行に一緒にいて英國にいる。

序章（1）夜会

大正9年 帝都

この時代、明治初期にかけて花開き始めた西洋を取り入れた文化が、大正デモクラシーと呼ばれる民主主義的な風潮の後押しを受けて、享楽的な文化を新しく生み出していった。

その反面、スラムの形成、民衆騒擾の発生、労働争議の激化など社会的な矛盾が深まつていったのもこの時期である。

日本史上、一番短いとされるこの時代は、大日本帝国の最盛、定期であつたと後世は語り、経済界で名を馳せた富豪達は「財閥」と呼ばれるようになつた。

その時代に、財閥令嬢に生まれた二階堂櫻子といつ女性は、自室の窓から、満月を見上げてため息をついていた。

「はあ…」

秋の夜会と称して、この屋敷では今夜、盛大な宴が催される事になつていた。

階下の大広間には、既に招待客が集まりかけていて、この日のために呼び寄せた楽団が、優雅な音楽を演奏している。

最近、いつにもまして自宅で夜会開かれる機会が、増えたようだ。主催者的一族として、来てくださつたお客様にもてなしをするのが嫌なわけではないが、こうも頻繁だと、さすがに気疲れする。

その時、部屋を扉を軽く叩く音がした。

「櫻子、もう客人がお見えになつてゐるぞ。いつまで部屋にこもつてゐるつもりなんだ。」

兄の桃真の声だった。

扉を開けると、洋装に身を固めた桃真が腕を組んで立つていた。

「あら、兄様の洋装姿なんて久しぶりに見たわ。」

三十歳にして、帝国陸軍少佐である兄は、いつも軍服か和装しか見たことがなかつた。そういえば、そんなに「流行つてゐるから」と、紅茶で有名なカフェに一緒に行つて欲しいと懇願しても、渋つた過去がある。

最後には、櫻子におれて、不機嫌そうな顔をして、後ろをついて行つてくれはしたが。

「あら、兄様、じやない。父様から、櫻子はどうしたのか、と言われたのだ。もしや、体調でも悪いのかと思つたが…さぼつか、その顔は。」

「ちがうわ、ちょっと髪のほつれを、直していたのよ。」

後ろ髪の束をねじりあげて髷にしたこの髪型は、花月巻きと呼ばれるものだ。それに、白金製のあまり派手ではない簪を挿した。

「ほう…、夜会服を新調したのか。それが父様が、神谷さんに頼んだ、と言つていたものか？」

神谷さんは、数年前から父の秘書として働いている青年の名前だ。実家が、有名な洋装店で、彼自身も仕立てに関しては、素晴らしい技術を持つてゐるそうだ。

しかし、寸法を測つたのは屋敷の女中で、どんな服が着たいかをスケッチに描いて、要望を沿えて送つただけにも関わらず、立派な服を仕立て送つてくれた。

「少し、地味すぎないか？」

姿見に映つた自分は、新調された紺色の夜会服で飾つている。なるべく地味にしてくれ、と懇願したおかげで、襟も首周りを覆つているし、袖も、肘まで伸びている。

しかし、仕立てのおかげで、お堅い女性といつよりは、控えめな印象を与える服に仕上がつていた。

腰周りの位置が高い場所に置かれてあり、柔らかで直線的なドレスだつた。何よりも、コルセットを使わないで済むのがいい。

神谷が言うには、仏蘭西の流行を取り入れてみたのだそうだ。

櫻子の母は、華族の出身であったが、仏蘭西人の血を半分受け継

いでいた。

その為、櫻子は、目や肌、髪の色は、日本人の特徴をそつくり受け継いでいたが、顔の彫が深くて、他人からは艶やかに映った。ゆえに、周囲からは、派手好みと勝手に勘違いされてしまう」とも、櫻子が地味な装いを好む理由の一つだったのだ。

「少なくとも、俺の好みではない。」

「兄様の好みにしてどうするのよ。私は今まで、一番気に入っているわ。」

「殿方の視線を少しばかり考慮せよ、ということだ。夜会とはな、麗しい淑女が、紳士と出会う為の場所でもあるのだぞ。世の女性達に比べて、令嬢であるおまえはその機会には恵まれているはずなのだからな。にもかかわらずだ。」

桃真の脳裏にある出来事が浮かんだ。

「この間も、玲子嬢と浅草に行つた時に、絡んできたならず者たちを蹴散らしたというではないか。全くあきれた事だ。」

玲子嬢というのは、春日財閥の娘で、私の一番の友人で、よく一緒に出かけている。きっと、今日の夜会でも会えるはずだ。

「あら? どうしてあきられなくちゃいけないのよ。玲子も一緒に居たのよ? 撃退しなければ危害を加えられていたかもしれないじゃないの。」

「おまえはそれでも、女学校の教師か?」

櫻子は、国語の教師として、教壇で教えるのが職業だった。

「そういう時はだな、まず周囲の人助けを求めるのだ、普通は!」

浅草にはいつも人が居るが、どうその事だったので、誰もが様子を伺っているだけであつたから、いうことになつたのだ。

「いくら、剣道で三段を持つていてもだな……。」

「四段よ、兄様。」

「……おかげで、一階堂家の娘は、はねつかえりで娘らしかぬ、とう噂だ。このまま、だらだらと年を重ねたら、嫁にもらつてくれ

ださる方もなくなるぞ。」

桃真は、櫻子の手を取り、がつくりと俯いて落胆した。

近づいた兄からは、甘みの強い白檀の香りがした。

彼の自室は、櫻子の洋風の部屋とは違い、畳の敷かれた日本様式の部屋で、時々部屋で炊いている香の匂いが、いつの間にか服や体に移つたのだろう。

「いいわよ別に……兄様が家を継いで下さるのでしょうか?」

「あのなあ……俺は父様とは血は繋がっていないのだぞ。」

実は、桃真是、実の兄ではなく、母方の従兄弟だった。母が、なかなか子供ができる体質とわかり、母の姉の家から養子として引き取つたのである。

その家は由緒正しい華族の家柄であったが、多額の借財を抱えており、何人も子供を抱えいた事に加えて、当主が病気がちであった。よつて、数多くの候補者の中から、桃真を養子として向かえた方が、相手の家の助けにもなると梅造は判断し、向こうもそれを望んだのだった。

その後に、姉の撫子、次いで櫻子が生まれたのだった。

「あら、まだそんな事を言つてるの?父も、亡くなつた母も、兄様とそのお嫁様に家を継がせる気持ちでいるわよ。もし、入り婿を取るつもりなら、撫子姉様の時に、そうしてたわよ。」

父は、婿を取らず、撫子を嫁に出してしまつた。ちなみに、政府の若い官僚に嫁いだ姉は、現在は、旦那の英國への洋行に一緒について行つてるので、日本にはいない。

その時、足音がして、新たな人物が私の部屋の前に現れた。

「失礼します、お嬢様。」

白い手袋をはめた、家令の斎木萩人が立つていた。

いつもは、グレー や茶色の背広を着て いることがあるが、今日は黒い背広をきつちりと着込んで いる。太くて艶やかな黒髪は、香油で整えられていた。

ほのかなオード・トワレの香りがした。

男性的な渋みと爽やかさを併せ持つ香りだったが、それがなんの成分で出来ているかはわからないことから、神秘的で謎めいた香りでもあった。

強く主張しすぎないその香りは、斎木によく合っていた。
兄も百八十もあるうかという高身長だが、斎木の方が少し高かつた。

それは、灰色の瞳と彫の深い顔立ちから推測できるように、彼は混血児だった。母親が、オーストリア人である為、櫻子よりも異国の血をより濃く受け継いでいる。

元は、類稀な音楽の才能を持ち、東京音楽学校を首席で卒業した、二階堂家の書生だった。しかし、独逸留学中に、運悪く海難事故に巻き込まれ、指を痛めてしまつたことから、演奏者としての道を閉ざされてしまったのだ。

そして、今は、二階堂家で執事をしながら、時々、富裕層の子女に音楽を教えている。

屋敷には女当主、つまり櫻子の母親は、すでに他界してしまっていることから、屋敷の筆頭使用人として、采配を振るつてするのが、彼であった。

財閥といえども、二階堂家はそれほど派手好みではないので、通いの料理人と女中が数人、自慢の日本庭園を管理する園丁、そして住み込みの使用人としては、斎木しか使用人は雇っていない。しかし、夜会の時だけ、特別に使用人を増やしていたので、大変そうだった。

「旦那様が、お嬢様の姿がお見えにならない事を心配していらっしゃいます。」

「斎木まで呼びに来てくれたのね。」

「ご気分でも優れないのでしょうか？ でしたら、旦那様には、私が上手にお伝えしておきましょうか？」

感情を表に出さない人なので、いつも無表情だが、良く気がついて気配りが出来る人だという事を、櫻子は知っている。

「大丈夫よ。体調が良い事は、兄様にはばれてしまったし。ありがとう、すぐに広間に行くわ。」

「そうですか…。無理はなさらないで下さいね。何かあれば、さりげなく私や他の使用人を呼んでくだされば、それなりに対処はいたしますから。」

響きのある低音。斎木は、ヴァイオリンの演奏者を目指していたが、音楽学校では声楽も習うのだろうか、と櫻子は思つた。
「では、私は、まだいろいろござりますので、御前を失礼いたします。」

一礼した斎木が、階段を下りていく音が聞こえた。

「…斎木に対しては、俺より優しくないか？」

「主が使用人に対して優しくするのは当然でしょう？」

西洋嫌いの桃真であるが、斎木の事は嫌いではなかつた。

それは、彼がそれほど裕福な家の出身でないのに加えて、混血児である事から、音楽学校時代に苦労をしていた事を知つていたからだ。

今、思えば、斎木が首席で卒業した事、独逸への留学が決まつた事に一番喜び、そして、怪我をして夢半ばに帰国した事を一番悔しがつていたのも、桃真だったように思つ。

「それに今日の斎木は、眼が回るくらい忙しいはずだわ。お母様がまだ生きてらつしゃた頃は、一人で仕切れたけど…。年配の執事は、高齢だったから、亡くなつてしまわれたし。斎木を助けられる熟練の使用人が必要よねえ。」

あと、一人くらいいは、執事を雇つた方が良いのかもしない。

「戻らないと、俺も怒られそうだ。先に戻るぞ。」

桃真が去つてから、櫻子も、階下へ降りる為に部屋を出た。

序章（2）夜会

父と談笑していた貴婦人達の関心が、自分に向けられた。

「今晚は、来て下さつてどうもありがとうござります。亡くなつた母も、屋敷の中が皆様のおかげで華やかになつて、きっと喜んでいますわ。どうぞ、じゅつくりしていつてくださいませね。」

世辞を受け止めながら、一人ひとりに、あいさつをする。

「櫻子、この新しい洋装が、神谷くんが仕立ててくれた物だな。」

梅造は、櫻子の夜会服に視線を移した。

「彼の技術は素晴らしいな。お礼を言いなさい。」

梅造が、後ろに控えていた青年を、前に押しやつた。

「そんな……理事長……。」

神谷藤隆は、謙遜から手を顔の前で振つた。

櫻子は、父の秘書の一人である彼を、気に入つていた。

いつも柔軟な笑みを浮かべていて、精鍊で優しい性格をしていた。例えるなら、陽だまりの中の蒲公英。

「神谷さん、お久しぶりですね。櫻子です。品の良い服を仕立ててくれてありがとう。」

「いいえ、喜んでくださったのならば、造り手として光榮ですよ。」

神谷は、少しばにかんで笑つた。

ふむ、と梅造が、あごの辺りを手でかいた。

「どうしたの、父様？」

「そんなに若かったのか、と思つてね。仕立て職人から私の秘書なぞをする事になつて、大変だと思うが、叱りつけた記憶がないのだよ。」

梅造は、神谷と自分の娘を見比べて、娘の方を見て、息を吐いた。

「ちよつと、今のため息は、どう意味なの、父様？」

「私が頭があがらない程、神谷くんは優秀なのに、おまえと来た

……。」

「父様！」

神谷は、罰が悪い気分になつた。彼のせいではないのだが。

「いずれ、神谷くんには、服の知識を生かして、うちの紡績事業が、百貨店を任せることもありでいるのさ。神谷くんには、お前も失礼の無いようにしなさいよ。」

「そんな、理事長、僕は、お嬢様に気兼ねしていただくような者ではありませんよ。」

梅造は、さらに赤くなつた神谷を見て笑つた。

「きみはいつでも謙虚だね。仕事をしていく上では、少し傲慢になつた方が上手くいくときもあるのだよ。……そうだ、櫻子、神谷君を、庭の池に案内してあげなさい。」

「ええ、喜んで。」

「庭の池に案内してあげなさい」というのは、「少し、休憩できる場所に人を案内してあげなさい」という意味だと、父から言いつけられていた。

おそらく、神谷は、その優しそうな容貌と、品のある様子から、貴婦人達の注目の的である事は間違いなかつた。おそらく、ずっと話し続けて気疲れしているに違いない。

灯りのともつた庭先には、飲み物が置かれた台もあり、数人の客も広間から一息つくために出てきたようだつた。

日本庭園の大きな池には、橋がかかつてあり、神谷と櫻子は、その上で、水面に映つた月を眺めながら、ぼんやりする事にした。

「理事長は、どうやら私に氣を使つて下さつたようですね。」

「だつて、ずっと父について下さつてお客様とお話して下さつていたのでしょうか?少し、休憩されないと明日は声が枯れてしまうわ。

「

「でも、それは理事長も同じですよ。」高齢の分、私より体の負担は大きいはずです。そろそろ、休憩して頂かないと。」

「父の体調まで気を使ってくださつて、感謝しますわ。」

「秘書として当然ですよ。僕なんかを拾つてくださつた事でも、

感謝しているのに、秘書の一人にまでして下さつた。」

僕は、神谷洋装店という所の跡取り息子だったんですね、と橋の下に映る月を眺めながら、神谷が語り出した。

「まあ、神谷洋装店の？」

初耳だった。

銀座に本店があつて、他にもいくつかの支店を持っていた指折りの大店、だった。

「明治の文明開化の頃に、いち早く洋装に目をつけ、その専門店になる事が出来たのですが、先代の跡を継いだ僕の両親は、経営の才能がなくてね。投資に失敗して、その心労から一人とも、急になくなつた。借財をきれいにする為に、店は他の洋装店に売りました。」

まだ、若いのに、そんな苦労をしていたなんて、櫻子は知らなかつた。

いつも、父の隣で、柔らかに微笑んでいた青年だったから、そいつたドロドロした運命とは離れた世界の人間に見えていた。

「その時にお世話になったのが、一階堂銀行だったのですが、どういうわけか、理事長の元に僕の噂が届いていて、そして、何もかも失つた僕を雇つてくださつたのですよ。」

実は、残された神谷は、洋装店の跡継ぎとして素晴らしい技術と感性を持つていた。鬼才、とも表現できる程だつた。

あまりに抜きん出た才能だつたが為に、神谷洋装店と親しかつた同業者は、どこも彼を雇うことを恐れ多いと感じた。

そして、彼らの多くは、同時に債権者でもあつたため、訪れた銀行担当者に、その事を話していくのだった。

神谷の才能の噂は、そうして一階堂財閥の理事長の耳元まで届いたのであつた。

梅造も、どいかのお抱え職人になるよりは、経営を学ばせた方が彼の役に立つと感じて、彼を引き取る事に決めたのである。

「まあ、そうだったの。」

「はい、ですから私は理事長には、大変感謝しているのです。」

櫻子の方を向いて、微笑んだ。

「私も、神谷さんは感謝しているわ。」

微笑む櫻子に、神谷は首を傾げた。

「僕は、お嬢様に何か感謝していただくような事をした覚えがないのですが……？」

「何を言つてゐるよ、この服！仕立ててくれたじゃないの。私、なるべく質素な服を着たかったから、夜会服としては少し無茶な注文をしてしまったのだけれど、こんなに品良く仕上げて下さったわ。兄は、地味つて言つたけど、私はそうは思つていないの。」

「本当に喜んでくださつていたのですね！ありがとうございます。」

「お世辞だとでも思つていたの？」

「いえ……そんな事は……ありがとうございます。」

神谷は、どうやら自分の才能を謙遜しすぎる傾向があるようだ。

「……でも、お仕事つて、頭だけじゃなくて、体力も優れていないと大変なのね。神谷さんも、きっと父の後ろでいろいろ気を配つていたでしょうし。」

「そうですね。僕は運動の方はからつきしですけど、体力の維持はこれでも若いときから心がけるようにしてゐるんですよ。ですから、桃真さまがすぐに経済界に入らずに、士官学校に進まれたのは、賢明だと思います。体力も、身体能力もつくし、軍の内情に詳しければ、時勢にも敏感になれます。帝国陸軍での人脈も、将来役に立つかもしれませんし。」

「あら？ でも、父様は、兄様に士官学校に行くよといつた事は一度もなかつたわ。」

「でも、『自分の会社で働け、とも、大学に進学せよ、とも仰られなかつたでしょう？』

「確かにそうだ。」

梅造は桃真の進路に口を出した事はなかつたが、彼が決めた進路

をいつも応援していた。

特に、少佐に昇進したときには、狂喜乱舞して、いつにもまして豪奢な宴を催した事から、無関心でもなかつた事も証明できる。

「ああ、少しお喋りし過ぎました。僕としたことが。今日の主役を引き止めてしまつて申し訳ありません。僕にかまわず、広間にお戻りになつてください。皆さん、あなたの姿を見たくていらっしゃつた方ばかりなのだから。」

皆が、私の姿を見に？

「……どういう事かしら？」

櫻子が眉をひそめると、神谷は明らかにしまつた、といつ顔をして、目を泳がせた。

「説明していただけるかしら、神谷さん。」

「いえ、お聞きになつていらないなら、僕の口からは……。」

「あなたから聞いたとは、決して言わないわ。言つて頂戴。」

櫻子に腕をつかまれて、観念したように神谷が口を開いた。

「今晩は、あなたと桃真さんの為の宴だつたのですよ、櫻子さん。あなたと兄様の婚約者を決める為のね。」

「なんですつて？」

「今晩だけじやない。少し前の宴から、豪商、医者、帝国軍、官僚などの御曹司、良家の令嬢が、客人として招かれる事が増えたでしょう？僕は、あなたや桃真君がお気に召す方が、なかなか現れないのだと思つていたのですが。」

「わたくしは、知らなくつてよ。」

「……そのようですね。」

「きっと兄も知らなかつたに違ひないわ。使用人もね。斎木は知つていたでしようけど。」

「ちなみに、白状してしまうと、私もその候補者の一人なんですが……。」

「はい？どうして、神谷さんが？」

言つてしまつてから、はつと、気がついた。

先ほど父が、彼に自分の持つ企業のどれかを任せたい、と言つて
いたではないか。

梅造は、相当、彼を高評価しているようだ。

「決めきれないなら、僕はどうでしょうか?」

神谷が、櫻子に笑いかけた。

しかし、それには、いつもの柔軟な笑みに加えて、とても妖艶な
色気を含んでいた。

どきりと心臓が高鳴った。

彼は、時々、こういう表情をする事がある。本当に、一瞬だけ。
櫻子は、その度に、「色あひふかく、花房長く咲きたる藤の花松
にかかりたる……」と、いう一節を思い出す。

しなだれた藤の花房が長く色濃く咲いていると、とても素晴らしい
と清少納言も述べた視覚的な美しさに加えて、夜風に誘われて、
揺れる花房から立ち込める、藤の香氣の記憶さえも、呼び覚まして
しまう。

藤の花言葉は、「陶酔」。

「冗談ですよ。」

神谷は、またいつものような、顔に戻った。

「僕は、その候補者だとは、理事長からは聞かされておりません。
今晚も、単に秘書として、ついて来ただけですよ。日ごろ交流され
ている方々にお会いできる良い機会ですからね。」

からかわれているだけだと知つて、櫻子は安心した。

「ああ、あそこに見えるのは、京極様じゃありませんか?」

神谷は庭の隅で、何かを飲みながら、ぽつんと立つてゐる客の一
人に話題を移した。

「あら、ほんとだわ、菊弥さんだわ。」

「京極様は、大学の医学部を首席で卒業されて、今は陸軍医でし
ょう? 素晴らしいですね。」

「あんな所で何をしていらっしゃるのかしら?」

「お声をかけてあげなさつた方がよろしいのでは。あなたの幼馴

染でしよう？僕はそろそろ、広間に戻ります。理事長様が心配です
し。それでは、櫻子さん、また後で。
「

神谷が去った後で、櫻子は、菊弥にそつと近づいて、声をかけた。

序章（3）夜会

「今晚は、菊弥さん。」

「櫻子か…？」

櫻子に気がついて、驚いたように、やや切れ長の目を開く。
褐色の肌は、帝国陸軍での訓練による日焼けではなく、生まれつきだった。

口をつけていたのは葡萄酒だったようだ。

近づくと、独特の甘い香りがした。

「どうしてこんな所にいるの？ 中に入ればいいのに。」

今年で二十六になる京極菊弥の実家は、御家人に仕えていた御典医の家系であり、当主は梅彦と親友だった。

両家は仲が良く、櫻子と菊弥も幼少の頃から仲が良かつた。

そして、京極家の実家は京都にあつた事から、ゆくゆくは帝都の第一大学区医学校（現在の東大医学部）に行きたい、と思っていた菊弥は、上京し、一階堂家から大学に通っていたのだ。

もちろん、扱いは書生ではなく、親友の子息を預かるという関係だったのだが、他に居候していた書生に配慮してか、はたまた、その生真面目な性分からか、屋敷の中で一番熱心に雑用をしていくれていた記憶がある。

そして、櫻子が、女学校の教科を一つも落とさずに卒業できたのも、彼の家庭教師のおかげであったのは、余談だ。

「大佐殿を通じて、招待して頂いたんやけど、何分、こういった華美な場所は、俺には合わんらしいでな。しかし、せつかく誘つて頂いたのに、さつさと帰つては失礼というものやうづ。だから、理事長が、一通り客人への挨拶がお済になつたら、ご挨拶をして帰ろうとここで時間を潰してたんや。

優雅な京都弁で話す。

「相変わらず、真面目なのね。」

帰らずに、肌寒い秋の夜長に一人で立ち続けている所が。

櫻子は、こらえきれずに、少し苦笑した。

「私が付き添うわ。黙つて私の隣に居れば、余計なお喋りをせずに済むでしょう?」

櫻子は、葡萄酒を持つていないので、菊弥の手を取つた。

近づくと、彼からは、消毒液の匂いに混じつて、腕からは、菊の匂いがした。

一階堂家に居たときも、ほとんど毎日花を生けていた。特に春は、菖蒲、秋は菊の花がお気に入りのようで、今日もきっと、花を生けてからやって来たに違ひなかつた。

花の匂いで患者に迷惑をかけてはいけないから、といつも勤務が終わつてから活けていると聞いた事がある。

「それに、宴が中盤になれば、舞踏が始まつてしまつわ。菊弥さんは、舞踏は得意だから、一緒に踊つてくださると助かるわ。私は、ワルツなら大丈夫なんだけど、それ以上に早い音楽にはついていけないの。」

「そんなん、俺も得意やないわ。」

櫻子は、あまり得意ではなかつたが、菊弥の母親が、日本舞踊の師範である血筋からか、それなりに上手であつた。

明治の鹿鳴館時代から、諸外国との外交政策上の必要性から導入され始めていた社交ダンスは、大正には、富裕層にまで浸透し始めた。

「なんで、斎木さんに教えてもらわへんのや?」

「斎木? どうして?」

「ヨーロッパ留学してはつたんなら、必然的に踊る機会があるやんか。それに、彼は、音大出身やう。」

執事の斎木は使用人なので、夜会で踊る姿などは、見たことがない。

しかし、考えてみれば、彼は踊るのが上手いかもしぬなかつた。

「なんや、気がつかんかつたんか?」

図星だった。

盲点だった。

「と、とにかく、広間に行きましょうよ。」

「でもやなあ…。」

「その様子だと、何も召し上がりていないのでしょう?せっかく来て下さったんだから、まずは何か一緒に食べましょうよ。」

「ああ、そうやな。ほな、入らしてもらうわ。」

口の端をゆがませて、笑みを浮かべている。

櫻子に促されて、広間の方に行くことに決めたようだ。

父親から受け継いだ褐色の肌を覗いては、菊弥の顔の造りは、典型的な京美人である母親の面影を受け継いでいた。

その切れ長の瞳と、優美で端正な顔立ち、そして、菊弥の真面目で固い性格から醸し出される雰囲気は、そのままでいると、近寄りがたい印象を与えていた。

しかし、彼自身は、特に愛想に欠けていたわけではなく、人の前に出て他人と関わるのが、すこし下手なだけだった。

社交が苦手ではなく、単に下手であることを、付き合いの長さから、櫻子は見抜いている。

こうして、広間に引っ張り出して、今晚の宴に馴染ませれば、すぐに寛い令嬢達に囲まれてもはやされるに違いない。音楽が流れ始めれば、誰もが彼と踊りたがるだろう。

彼は、自身の技量もさることながら、女性にとって踊りやすいように誘導して踊るのが、上手かつた。

広間に戻ると、父の姿はなかった。その代わりに、神谷が、客の間を縫うようにして、客人に声をかけ続けていた。

「神谷さん、父は?」

「今、少し別室で休憩されています。」

神谷は、斎木と一緒に、広間の采配に勤しんでいた最中だったようだ。

飲み物のグラスがたくさん入った銀の盆を手にしている。

「今晚は、京極様。私は理事長の秘書をさせて頂いている、神谷藤隆です。起こしきださつてありがとうござります。」

「京極菊弥です。どうして私の名前を？」

「客人のお名前とお顔は、記憶させて頂いております。飲み物は何かいかがですか？」

菊弥が、何かの洋酒の入ったグラスを取ると、「じゅうくじ」という言葉とともに、一礼する。

「それでは、櫻子様、失礼いたします。」

「ありがとうございます、神谷さんも、時々は休憩をしてくださいね。また後でお会いしましょうね。」

神谷は、一人にもう一度一礼すると、広間の中央のほうへ進んで行こうとしたが、何かを思い出しどけ、きびすを返した。

「そういえば、春日玲子様が、お嬢様をお探しになつていきましたよ。」

「まあ、玲子も既に来てくれているのね。ありがとうございます、探してみるわ。」

神谷は、微笑むと、また歩き出した。

「俺は大丈夫や、おおきに。玲子嬢をお探ししてあげたらどうや? きつと、櫻子に会いたがつておられるやうや。」

「本当に…大丈夫?」

「首を傾げるな、大丈夫や。どうやら、俺の顔見知りも、たくさん招待されているようやしなあ。」

菊弥が広間を見渡すと、陸軍で見慣れた顔がいくつかあった。

「わかつたわ、また後で会いましょうね。玲子を見つけたら戻つて来るわ。」

「おう。」

菊弥は、片手を挙げて、また口の端をゆがめて笑った。爽やか、

ところよりは、妖艶だつたが、きっと、彼に自覚はない。

広間を半周ほどすると、他の貴婦人達と輪になつて、談笑している玲子の姿があった。

「あ、櫻子！」

彼女が、櫻子の姿に気がついて、他の子女に断つてから、輪から抜け出でくる。

「玲子、来てくれてありがと。数日前に会つたばかりだけど、私は毎日でも嬉しいわ。」

「私もよ。でも、来たときは、姿が見えなくて、気分がすぐれないのかと思つちゃつたわ。元氣そうで良かつた。」

「ちょっと庭にいたのよ。ごめんなさいね。」

櫻子をようやく見つけた玲子は、少し興奮しているのか、顔がすこし火照つていた。

まるで、日本人形のように、華奢な顔立ちに、白い肌は、どこから見ても春日財閥の、深窓の令嬢であったが、櫻子の無二の親友である彼女も、かなり活発な性格をしていた。

「この間の浅草の一件の後、手首や足が後から痛んだりしなかつた？」

「この通り、よ。」

「良かつたわ！あ、そうだわ、今日は両親と一緒に葵もついてきたのよ。珍しいでしよう？」

すると、自分達から遠くのほうの人の輪にいた人物が、自分の名が呼ばれたことに気がついて、こちらを見た。

背は百六十半ばある櫻子とほぼ同じだが、細身な体形のせいか、少年と呼んでも良さそうな、美青年がいた。

そして、こちらに近づいてくる。

艶のある黒髪に、白い肌をしている。あごも女性のようになじんで、長いまつげが目のふちに隙間なく生えている。

もし、女物の服を着ていたら、女性と見間違えてしまいそうだ。葵、というのは、玲子の一つ違ひの弟だった。

玲子が、日本人形のよつなら、彼はまるで西洋人形のよつな端整な顔立ちに、知性を宿した瞳をしていた。

事実、彼は、東京帝国大学の法学部に所属していた。

しかし、櫻子は、この親友の弟が若干苦手だった。

「今晚は、櫻子さん。」招待頂いてありがとうございました。」

「今晚は、葵君。」

爽やかな葵の笑顔に、櫻子も微笑み返す。

顔の筋肉の緊張を、彼に悟られていなか心配であつたが。

「じゃあ、僕は、失礼しますね。どうぞ、姉をよろしくお願ひします。」

「ありがとうございます、また後でお会いしましょうね。」

そして、先ほどまで談笑していた人の輪に戻つていった。

「あの子、夜会があんまり好きじゃないのに、今日は久しぶりに出席したもんだから、両親もびっくりしてるので。うふふ。」

「そ、そう…。」

「ねえ、櫻子、お願いがあるの。」

玲子が指を組んで、櫻子に懇願した。

「もうすぐ舞踏の時間になるでしょう？その間に、桃真様に、私のお相手をしてくださらないか、お願いしてもらえる？」
瞳を潤ませている。

「兄様に？玲子、あなたもしかして…」

「ええ、私が、櫻子よりもずっと、ずっと、ずっとと舞踏が下手なのは知っているでしょう？実の弟と踊るのも変だし、桃真様にお願いできないかしら？」

櫻子は、心の中でがくりとうなだれた。

まあ、知らない人と踊つて恥をかくよりは、賢明な判断ではある。

「それとも、桃真さまは、今晚はいろいろ方と踊らないといけないのかしら？自分のお屋敷の夜会ですものね。」

（そういうえば、兄様つて、踊れるのかしら？踊つていらっしゃるのを見たことがないわ。）

兄は、茶道と、武芸に關しては頼りにしていい。

他の分野は、わからない。

「大丈夫よ、今日は、菊弥さんが来てらっしゃるからー。」

「本当？ああ、嬉しいわ。」

玲子は、ほつと息をついた。安心したようだ。

菊弥は、櫻子のついでに、屋敷にし�ょっちゅう顔を出していた玲子の勉強もまとめて見ていたので、一人は顔見知りというか、玲子は、菊弥の少ない女性の知り合いの一人だった。

（でも、玲子が菊弥さんと踊っている間、私はどうすればいいかしら？）

菊弥と会った事で、すっかり安堵していたが、急に不安が襲ってくる。

異国の血を引く櫻子と、典型的な日本美人の玲子とでは見た目は全く正反対、と言つても良い程だが、性格や好み、行動様式はかなりの似たもの同士だった。

唯一の違い、といえば、櫻子が料理はできるが裁縫は壊滅的であり、玲子はその反対に、刺繡や編み物など、裁縫全般の才能はあるくせに、料理の味付けをすると、いつも恐ろしい結果となる事くらいだった。

（あ、兄様は、長男だから、きっとお客様のお相手をしないといけないから、無理ね。）

櫻子は、今晩あつた全ての男性の顔を順番に、思い浮かべた。

「父様と私は、絵的に悪くないけれど、父様も客人と踊りなさるだろう。斎木は使用人だし。神谷さんも秘書だから、客人に頼まれたら踊るでしょうけど。となると……。」

私は、誰と踊れば良いの？

「玲子、ごめんだけど、私も舞踏が心配になつてきたから、始める前に、知り合いにお願いしようつと思うの。ちょっと離れていいかしら？」

「ええ、もちろんよ。また後でお会いしましょうね。」

櫻子は、玲子としばし別れると、早速、候補者を探し始めた。

序章（4）夜会

広間をうろついたながら、見知った顔が居ないか探していると、神谷と同じように、客の間を行つたり来たりしている斎木に声をかけられた。

ほかの使用人も、空になつた料理の大皿を片付けて、食後の紅茶や、珈琲の準備と取替え始めている。

「どうかなさいましたか、お嬢様？」

「ありがとうございました。たいした事じゃないのよ。」

「冷や汗をかかれているようですが、『気分でも悪いのですか？』田ざとい。本当に斎木は優秀すぎる。」

「えっと、斎木も、私が踊るのが下手なことを知っているでしょう？だから、音楽が流れている間だけ、一緒に踊つてくださる方を最初に探しておこうと思って。」

「しかし、それでは社交の意味が無いのでは？」

「見も蓋もない。」

「でも心配なの！」

「心配要りませんよ。女性は、無理に踊らうとするのではなくて、力を抜いて、殿方の動きに合わせるだけで良いのです。何もしょうことしなくて良いのです。」

むしろ、女性側が踊らうとする気持ちを持つと、男性が上手く女性を誘導できなくなる。

「ダンスが上手く踊れないのは、相手のせい、だと思つくらいの気持ちでいらっしゃればよいのですよ。踊りが上手い男性なら、相手が初心者かどうかすぐに見抜いて、お嬢様の踊りやすいようにしてくださいねはずです。」

「本当？」

「それが社交ダンスというものですよ、心配要りません。」

しかし、踊らうとすると、失敗するから、力を抜けと/orのほど

「うこう事なのか、意味がわからない。」

「菊弥さんが言つていたけど、斎木は踊りが上手なの？」

「私ですか？」

「そうよ、踊つている姿を見たこと無いもの。」

「上手が下手かはわかりませんが、好きですよ。」

「そうだったの。」

「踊りは元々、歐羅巴の文化ですから、学生でも踊る機会があるのです。特に、私は音大生だったので、向こうに住んでいた頃は、頻繁に踊っていました。」

菊弥の話は、本当らしい。

「じゃあ、音楽が始まると、ちょっとだけ、教えて頂戴。もう、お料理も少なくなつたし、それ程忙しくはないから大丈夫でしょう？」

「私がですか？私は使用人ですよ。」

斎木は少し眉を顰めた。

「主様とは踊れません。踊りならば、桃真様に教えていただいた方がよろしいですよ。」

「兄様が踊りが上手だなんて聞いた事がないもの。」

「軍人様は、こういった社交の場も多いですから、きっと上手に教えてくださいますよ。」

「じゃあ、今から踊りの教師として雇うことにするわ。」

斎木は、鉄面皮を若干崩して、複雑そうな顔をした。

「……。」

「あなたは、お嬢様に客人の前で恥をかけと/or>うの？」

「……。」

誰も、そこまでは言つていない。

「だから、少しだけ教えて頂戴。私を助けると思って、ね？」

「……。」

沈黙の末、斎木は、陥落した。

「……わかりました。では、少し、場所を変えましょう。」

「まあ、ありがとう！」

広間を出て、客も使用人も、今は通過しないであろう廊下に移動した。

「まずは、まっすぐに立つ事から。頭の上から紐が伸びていて、天井からつるされているようなイメージです。」

「まるで、操り人形みたいね。」

「そう、そのイメージです。首も伸ばして……そうです。踊っている時も、常にこの姿勢を心がけてください。この姿勢を保つだけで、男性は誘導しやすくなります。」

斎木は、そこから櫻子の頭をやや後ろと、左側にそらした。

そして、櫻子の前に立ち、左手を持つて、自分の右手は、彼女の肩甲骨の辺りに添えた。

「これが、ワルツの基本的な構えです。女性は、男性の右側に常にいるようにします。お嬢様から見て、左ですね。左手は、ふわりと私の右腕においてください。決して、掴んではいけませんよ。」

「わかったわ。」

斎木は、櫻子が緊張しているのが伝わってきた。

「固くなりすぎないで下さい。風に舞い上がる綿帽子にもなった気分でいてくださいね。」

そういうわけで、なるべく体の力を抜くように心がける。

「後は、繰り返される三拍子のリズムに合わせて、男性が右足を進めたら、あなたは左足を下げる。右足を下げたら、左足を進めたらいよいだけですよ。」

やつてみましょ、と斎木がいい、一、二、三と口で拍子をとり始めた。

動き始めると、確かに、斎木の言つた意味がわかつた。

男性の動きに合わせて、足を合わせていけばいいのだ。

「そうです、お嬢様。心配されていた割には、お上手ではありますせんか。」

斎木が、単調な円運動から、向きを変える動きをした事がわかつた。

それに気がつくのが遅れて、櫻子は、足の動きを間違えてしまつた。

「『』、『めんなさい。』

「練習ですから、謝る必要はありません。足の踏み出し方を覚えれば、より上手に踊れるようになりますが、わからなくとも、ワルツの場合は、基本的に男性に合わせていれば、相手の方が勝手に連れていくつてくださいます。でも、いくつか簡単な踏み出し方は覚えていらっしゃった方がよろしいので、いくつかお教えしましょう。」

斎木は、簡単な動きをいくつか教えてくれた。

その動きを覚えてから、また練習をすると、まだ十五分も経過していないのに、格段に櫻子の動きは良くなつた。

そうこうしているうちに、広間の演奏が、聞く為の穏やかな曲調から、踊る為の優雅な曲調に変わっていた。

「そろそろ始まつたようですね。練習は終いにしましょ。」

「そうね、どうもありがとう。」

斎木は、踊りをやめて、櫻子の体を離した。

「また、教えてくれる？」

「……。」

斎木は、しばらく考え込んだ。

「旦那様が、そうしろと仰るなり。」

梅造が認めれば良いというわけだ。

「あら、私が夜会で上手く踊れるようになれば、父様は嫌な顔はなさらないわよ？」

「とりあえず、お嬢様、時間がもつたいないですから、広間におり行きください。」

斎木に、促されて、櫻子は戻ろうとした。

広間の前に、春日葵の姿があつた。

「また会つたね、一階堂さん。」

「今晚は、葵君。」

葵は、玲子が居ない場所では、櫻子の事を「一階堂さん」と呼んでいる。

「あなたは、踊りはお好きなの？」

「嫌いだね。どうして、良くも知らない人と手を取り合つて踊れるよね。西洋の考えは、時々僕には理解できない。」

「でも、その洋装姿は、とってもお似合いよ。」

「無理やり両親に着せられたんだ。この意味わかるよね？」

櫻子は、やや首を傾げた。

全くわからない。

「今晚の宴で、いろんな人と話したけど、皆、誰が一階堂家と血縁関係におなりになられるだろうか…って話ばかりだったさ。姉さんは僕が自主的に夜会に参加したと思つているけど、本当は、両親に無理やり引っ張り出されたんだよ。」

「…………。」

「あなた、馬鹿？ 僕も、あなたの婚約者候補らしいよ。姉もね。」

玲子が、兄の婚約者候補として？

「姉さんは、そのことについては知らないけどね。知つてたら、桃真さんを自分の舞踏が下手なことを隠す為の相手として、あなたにお願いするはずないからね。ばかばかしい。」

確かに、今晚、踊りの相手として、桃真を独占する事は、もしかしたら、令嬢達の反感を買うに違ひなかつた。

「僕も、自分の名前に花の名前があるだけで、ここに呼ばれるなんて、災難だつたよ。」

「花の名前つて？ 何か関係あるのかしら？」

「何で、あなたが知らないのさ……？」

今度は、葵は明らかに見下した視線を送った。

「一階堂家の当主には、花の名前が含まれている。そして、一階堂家の娘が嫁に嫁ぐ時は、相手にも花の名前が含まれていなくちゃならない。そうでなければ、不幸が訪れるとか、血は絶えてしまうとか、言い伝えがあるんだってさ。なんで、自分の家の事なのに知らないのさ。」

「確かに、撫子姉様の旦那様の名前も、菖蒲あやひとだつたわ……。」

菖蒲の「菖」だ。珍しい名前だと思って、記憶に残っていた。

「嘘だと思うんなら、今日の若い男性客の名簿を見てみる事だね。」

「いえ、いいわ。貴方のお話、嘘だと思っていないもの。」

「そう。じゃあ僕は失礼するよ。」

葵は、冷たく笑うと、広間に戻ろうとした。

その時、唐突に、ただ事ではない物騒な物音がした。

優雅な演奏も止み、貴婦人の甲高い悲鳴が起こっている。その声音からは、恐怖が読み取れた。

「な、何があつたのかしら……？」

「わからない、様子を見てみよ。」

一人は、すぐに広間に向かった。

序章（5）夜会

広間に戻ると、そこは思いもしなかつた光景だつた。

阿鼻叫喚の修羅場、といった表現では表現しきれないほどの惨劇。中央では、華やかな宴には似合わない野蛮人が、三人、白刃を振り回して暴れている。

その者達がそれ以上奥へは進まないように、日本刀を握り締めて、食い止めているのは、菊弥と、兄の友人である軍人の招待客の二人だつた。

櫻子は、絶句した。

「あの暴漢は…？」

男達は「天誅！」と奇声を上げながら、食事が乗つた卓子を切り付けていた。派手な音を立てて食器や花瓶が割れるたびに、貴婦人の悲鳴が上がつた。

「櫻子さん、春日様、早く奥へ逃げて下さい。」

肩を捕まれて振り返ると、神谷がいた。今まで見たこともないような険しい表情をしている。

「おそらく、アナキスト無政府主義者です。数年前から、陰を潜めたと思っていましたが、最近は、こうして下っ端どもが夜会を襲撃していると聞いたことがあります。」

社会主義者にとつて、富裕層は社会を蝕む害虫、としか映らないんだろう。

外からも、奇声と気合が入り混じつた音が聞こえる。

兄の声も混じつているようだつた。

「門まで来たところで、警備人が気づいて知らせてくれたから、桃真様達が飛んでいつてくれたんですけど、三人は、すり抜けて広間に入ってきたようです。」

斎木は、他の使用人と一緒に、客人を出来るだけ広間から逃がさせようと、賢明に誘導している。

その時、一度に二人を相手にしていた、菊弥ではないもう一人の軍人が、ならず者に追い詰められて、重心を崩しかけた。

「櫻子さん、ど、何処へ行く！！」

櫻子は、考えるというよりも、先に体が動いてしまっていた。逃げる客人とは反対方向へ。

「すぐにお帰りなさい、無礼者！！！」

後日、この場にいた客全員が、深窓の令嬢が青筋を浮かべて、鋭い眼光で無頼漢を叱りつけたのを見た経験は、後にも先にもこれつきりだったと、語る。

しかし、当の本人は必死である。

この広間の誰よりも。

「あなた達をお呼びした覚えはなくつてよーーー！」

絶叫ではなく、気迫のこもった怒号を貴婦人から飛ばされて、さすがの無頼漢もすこし驚いたようだった。

「邪魔するな…、女！！」

一人が、櫻子に向かつて、白刃を振りかぶる。

その瞬間に、櫻子は、卓子に飾られていた、細長い焼き物の花瓶のふちを掴んだ。

振り下ろされた白刃を、超絶的な反射神経で避ける。

そして、掴んだ花瓶で、無頼漢の額の、やや上をめがけて殴りつけた。

「ぐあっ……！」

あまりの痛みで、日本刀を手放して必死に額を押さえる。きつと、脳震盪を起こしかけているに違いない。

「この女…！」

しかし、もう一人の男が、仲間をやられた怒りで、向き合つていた軍人から、櫻子へと標的を変える。

「危ない、櫻子！！」

菊弥か、誰かが、叫んだ。

男の予想もしなかつた動きに、反応が遅れた。

とつさに田を瞑る。

死を覚悟する間もなかつた。

「ぐげげえええ…顔が…！」

その時、櫻子の頭上で、釜蛙が苦痛で身をよじつたような、醜い声が絞り出された。

体に痛みはない。

おそるおそる田を開くと、無頼漢は、小さめの椅子の下敷きになつていた。

すると、背後から、少し変わつた薔薇のよつな深い匂いがした。それは、オード・トワレによるものだと気がついた時には、誰かの腕に体を抱きとめられていた。

「怪我はないか、お嬢さん？」

「え…？」

櫻子は、おそらく椅子を無頼漢に命中させたであろう男を見た。

正確には、見上げた。

背丈が高くて、がつちりとした逞しい体をしている。

そして、洒落た黒の背広に、アスコット・タイをしめた洗練された服装からは、男の色気のようなものすら感じた。

櫻子も、この非常事態において肝が据わっていた方だったが、男の方も、全く揺るがず、落ち着いている。

その自信に満ち溢れた雰囲気から、実際より、もつと背が高くて大きな人物ではないかと錯覚してしまう。

「おい、そのあと一人、もう止めにしないか？直に警察もやって来る。それとも、今度は、本当に顔を潰されたいのか？？…って、もう遅かつたか。」

残りの一人は、既に菊弥にのされて、氣絶していた。

他の一人も、起き上がる気配はない。

その時に、警官が広間に押し寄せて来て、氣絶したままの犯人を捕縛して、連れ去つていった。

おそらく、門でも同じような事が起こつたのだらう。

血相を変えた桃真が、外から飛び込んできた。

「おい、大丈夫だつたか、櫻子？」

「兄様！」

櫻子は、偉丈夫の腕をすり抜けて、桃真に駆け寄った。

桃真是、櫻子をしつかりと、抱きしめた。

突然、力強く抱きしめられて驚いたが、兄からは、血なまぐさい臭いがしない事に安心した。切り合つたわけではなさそうだった。きっと、得意の柔術でしとめていたんだろう。

「良かつた…。」

「ちょっと、兄様？？」

桃真是、はつ、と気がついて、櫻子を離した。

「あの方が助けてくださつたのよ。」

「そうか、すまない。妹を助けて下さつて、感謝いたします。」

桃真が、男性に向かつて、一礼する。

「いや、なに、礼を言われることの程でもありません。」

なんでもないこととしたかのように、答えた。

「そうだ、菊弥！」

「なんですか？」

「頼む、ちょっと軽傷を負わされた者がいるのだ。手当をしてやつてはくれまいが？」

「もちろんです。」

そうして、菊弥と、桃真是再び屋敷の外へと出て行つた。

「さて、もう夜会どころではなもそつだ。遅れて到着してしまつたが、帰る事にしますかな。」

男性は、先程のはずみで足元に落ちてしまつた、自分の黒い山高帽を拾つて、深くかぶりなおした。

「あ、あの…ありがとうございます。助けていただきて…。」

「いや、当然だろう。あの状況で、誰も何もしなかつたならば、お嬢さんは、今頃あの世行きさ。いや、しかし、そのおかげで俺は…。不幸中の幸いというか、なんと言つが…。」

「何か、仰つた？」

「いやなに、こっちの話を。それより、手首をひねつたりはしなかつたかい？」

「心配してくださつてありがと。全く問題ないわ。」「そうか。」

男も、櫻子がなんともないとわかり、安堵したようだつた。飘々とした面持ちで、櫻子を見ている。

ふいに、櫻子は、この人は何かに似ている、と感じた。

「あつ！」

「どうしましたかな、お嬢さん？」

「あなたを見て、何かに似ているな、と思つたのよ。思い出したわ。」

「ほう…、何に似ていましたかな？」

「音楽よ。この間、横浜港に行つた時に、米國から来た船員達が演奏をしていたのを聞いたの。

その音楽の雰囲気が、なんとなくあなたと合つてるわ、と思つて。

「無邪気に笑いかけた後で、

「あ、でも、私、その音楽をその時に初めて聞いたから、実は良く知らないのよ。氣を悪くされたらごめんなさいね。」「

と、謝つた。

男は、じらえきれずに吹き出して、ははは、と笑つた。さも、愉快そうだった。

「堪らないな、お嬢さんは。實に面白い。」「

「『』、ごめんなさい！失礼だったかしら？」「

「いや、俺の方こそ、笑つてしまつてしまないね。」「

初対面の雰囲気から、傲慢そうな男だと思ったが、結構、快活な男もあるらしい。

「お嬢さんが初めて聞いたのも無理はない。それは最近、日本に渡ってきたジャズという音楽さ。

アメリカのある場所で生まれた音楽だ。」

櫻子は、記憶の中の音楽が、そのような名前である事すら知らなかつた。

「俺の商売は、貿易商でね、外国の客人を相手に商売をしているものだから、自然と西洋の文化の影響を受けてしまつていて。それをぴたりと言い当てられたものだから、笑つてしまつた、というわけさ。」

「あら、やうな。変な」とを言つてしまつて氣分を害されたのかしら、と心配したわ。」

ははは、と男は再び笑つた。

「お嬢さんは、またいづれお会いしたいものだ…。」

「ええ、お名前をお聞きしてもよろしいかしら？私は、一階堂櫻子よ。」

「いやいや、名乗るほどの者でもないのでね、それでは、またいづれ。」

そして、男は、去つていつてしまつた。

「あ、君…？」

ぴたり、と足を止め、乱闘の一歩始終を見ていた、葵に声をかけた。

「出しゃばつてしまつて、申し訳なかつたね、お坊ちゃん。」

「は？ アンタ、何言つてるわけ？」

葵に睨み付けられても、どこ吹く風、といった様子で、そのまま行つてしまつた。

「一階堂さん、あの人と知り合い？」

葵が、不機嫌そうに尋ねた。

「いいえ、初めてお会いしたわ。葵君がご存知の方？」

「ちよつとね。うちの会社と取引をしていたのを見た事がある。一代で身を起こして、今は、海外に広い人脈を持つ貿易会社の若社長だよ。あちこちの夜会に時々顔を出している、有名な成金の一人だよ。」

「へえ、あの方が……。」

納得がいった。

あの、洒落た服装に負けない、自信に満ちた雰囲気は、事業に成功した証だつたのだ。

「あの人も招待されたのか。素性のはつきりしない方だけど、ずいぶんなやり手らしいよ。女性に入気もあるから、良い所のお嬢さんを全部骨抜きにしているそうだ。そつか、財閥令嬢を娶れば、自分の事業をさらに拡大できるものね。」

納得したように、葵が言った。

「に、しても、あなたがそこまでお馬鹿さんだとは思わなかつたよ。日本刀を振り回す輩に、突っ込んでいくなんてどうかしてる。」

葵は、あきれた声を出した。

「せつかく、花婿探しの宴だったのに、なにやつてるのさ。もう、これで、嫁の貰い手はないかもしれないよ。あなたみたいな人が義理の妹になるなんて、耐えられないと考える女性がいるなら、大佐殿の婚期も遠のぐよね？」

親友の弟だが、やっぱり、この意地悪な性格を好きになれそうにない、と感じた。

騒ぎが収束に向かう中、確かに、少し、考えに思慮深さが足りない、と反省したのも事実ではあつたが……。

その時、耳を劈かんばかりの悲鳴が庭から聞こえた。

桃真や菊弥が慌てて駆け寄る。その後に、警官も続く。櫻子も、じつとしていたらず、後を追つた。

草陰には、白目をむいて、人が横たわっていた。

月明かりが照らすのは、バツの字に無残に切られた背中。

男性は、すでに、事切れていた。

生前の恐怖を、その顔に刻むように、口を大きく開いたまま。

「櫻子！」

遅れてたどり着いた櫻子に気がついた桃真は、彼女の視界を遮る為に、抱きしめ、そのまま現場から遠ざかった。

「ちよつと、兄様、押さないでよ。後ろから倒れてしまいそう。」

「見るもんじゃない、なんでついて来るのだ、おまえは。」

「十分に、見えない所まで移動し、櫻子を解放した。」

「うちのお客さまが亡くなられたの？」

自分で口にしたくせに、恐怖で悪寒が走った。

「……ああ、の方は、堂島社長だ。堂島金属会社のな。」

「そんな…。」

泣きそうになつた。

人が一人死んだのだ。

何かが違つていれば、死んでいたのは自分だつたのかもしない

のに。

「現場は警察にまかせよう。今晚は、念のために、おまえの部屋ではなくて、俺の部屋の隣を使え。いいな？」

騒ぎを確かめるべくやつて来た斎木に、「女中に言つて、あの部屋に寝具を準備してやつてくれ」と言つて、櫻子を引き渡す。

恐怖に震える櫻子は、そつと斎木に背中を支えられながら、屋敷に戻つた。

序章（6） 日曜日ノ訪問者

あの事件の日から、一週間がたつた。

今日は、日曜であり、学校で国語の教師をしている櫻子の仕事は休みだつた。

あの時、父の梅造は、夜会の途中で休憩する為に別室に居たところ、田代の疲れが蓄積していたのか、そのまま寝入つてしまつて、結局おきたのは、次の朝だつた。

あのような騒ぎがあつたにも関わらず、目を覚ましもしなかつた豪胆さに、斎木は、「この娘にして、この父あり」と思つたが、その鉄面皮の下に隠した。

そして、朝一番に、神谷から昨晩の襲撃事件と、広間の被害の見積額を聞いたが、聞き終えた後は、しばらく笑い転げて、薰をも睡然、とさせた。

「櫻子が、日本刀を振り回す輩に突っ込んでいつて、啖呵を切つて、振りかかつた白刃を避けて、相手を花瓶で氣絶させた……はつはつ……！」

一言一句、全て紛れもない事実だが、総理事長の一派の関心事がそこか、と思うと、周囲は脱力した。

人が、屋敷内で死んだのだというのに。

しかし、今日も、その梅造は、朝食の席でなにやら「機嫌だつた。

「どうしたんですか、理事長？」
と、神谷は恐々尋ねた。

「つきつきといふよりは、にやにやとした笑いを浮かべているので、はたからみると、何かあつたのか、と思つてしまつ。

日曜日の朝は、桃真、櫻子、そして梅造の三人で朝食をとるのが、一階堂家の習慣になつてゐる。

今日は、それに加えて神谷も同席だ。

彼は、昨晩は一階堂家に泊まつていたので、今朝は一階堂家の

者と朝食を取る予定である。

ちなみに、今日は、和食だった。

「いや、櫻子の面白い様子が見れなかつたのは、残念だったな、と思つてな。」

なんだ、思い出し笑いだつたのか。

「面白い、つて何よ、父様？私も必死だつたのよ？」

怒つてゐるようだ。額に皺がよつている。

「なのに、その跡、嫌味を言われたのよ。嫁の貰い手がなくなるつて。」

「違ひないな！」

面白かつたのか、梅造は、またカラカラと笑い出した。

「確かに、今後は、お前に恐れをなして、並みの肝をもつた男ならば、もう、求婚の手紙を届けてくる」ともなかろうよ。」

そういつて、味噌汁をすすつた。

「だが、そんなことで、恐れをなすような小物は、義息子にはいらんから、丁度良い。私は、面白い男と酒が飲みたい。」

「父様の酒飲み相手を探しているわけじゃあなくつてよ。」

櫻子は、梅造を睨みつけながら、焼き鮭に箸を伸ばした。

「だが、しかし、篩いにかけられて残つた男は、より熱心に、お前に近づいてくるだろうよ。」

そして、にやり、と笑つた。

「え、父様？そんな手紙が届いているの？」

「ああ、お前に言わなかつたが、届いてるよ。」

寝耳に水だ。

「桃真にもな。」

「え、俺にもですか？」

「当然だ。わしからは、そろそろ身を固めよ、とは決していわんが、二人とも、今の世にどんな貴婦人や紳士がいらっしゃるか、だいたいわかつただろう？その機会を与えたに過ぎんよ。」

「でも、名前の件は？花の名前がないといけないんでしょ？」

「まあな。花の名前ではない男の元に嫁げば、短命になる、と先祖から伝えられている。実際、過去を見ると、そういうえなくもない。

長生きしたければ、そういう男を伴侶に選ぶ事だな。」

ちょっと、適當で、いい加減な言い方にも聞こえた。

「また近いうちに、夜会を開くからな。まあ、ゆっくり考えるといい。」

「ええ、また夜会を？」

「気に入らないのか？」

「だって、ダンスが苦手なんですもの……。」

「おまえなあ……。」

梅造はあきれた声を出して、我が娘を見た。

「どうして、子女が剣道ができる、ワルツが踊れんのだ。普通、逆だぞ。」

桃真も、父に賛同した。

「お前な、日本の外はシベリア出兵だのといひいろ、物騒なのだ。その中で、夜会を開けることに感謝しろ。」

「恥をかくのは嫌なの。じゃあ、兄様が教えてくれたらいいじゃないの？」

櫻子は、軽く兄を睨んだ。

「少佐殿が、踊れないわけはないわよね？」

「踊れぬわけではないが、女側の足順がわからん。」

櫻子の挑戦的な視線を受け流して、白米を頬張る。

「なら、櫻子、しばらくは斎木くんにでも教えてもらひえ。」

梅造が、女中に茶碗を差し出して、お代わりを持つてくるように言った。

「それは、いい考えですね。」

今まで、静かにしていた神谷も顔を上げた。

斎木は、一同が食卓を囲むこの部屋の、扉の横で立っていたが、突然、話題に自分が持ち上がったので、驚いた。

「音楽に関することは、きみに任せておけばよい。のう、斎木く

ん。

「私ですか…？」

「ああ、しばらく、櫻子が夜会を嫌がりんですすむようこ、踊りを見てやつてくれ。」

斎木は、梅造と櫻子を交互に見比べていたが、最後に、わかりました、と返答した。

「あら、父様の許可がでたわね、斎木！」

どうやら、自分は、墓穴を掘つてしまつたらしい事に、斎木は気がついた。

「じゃあ、今週中に上達しとかないと、次の夜会に間に合わないわね。」

「せいぜい頑張れ、櫻子。」

他人事のように、桃真が言った。

「そうだ、忘れておつた。」

唐突に、梅造が言った。

「櫻子、午前中に、客人が来るぞ。」

この人の思考は、時々唐突に何かが飛び出す時がある。いつも、様々な事に思考をめぐらせているせいだろうか。

「お前に御用だそうだ。わしと、桃真は出かける用があるから、斎木にはよろしく伝えておいたぞ。」

「客人…？ 私に？」

「ああ、ま、会えばわかる。」

そうして、梅造は、最後に卵焼きを食すと、それで朝食を終いにした。

序章（7） 日曜日ノ訪問者

その客人とやらは、十時頃に訪ねて來た。
自室で読書をしていたところを、斎木に呼ばれて、応接室までや
つてきた。

「失礼します。」

部屋の扉を軽く叩くと、「じゅう一」という斎木の声が聞こえた。
長椅子にゆつたりと腰掛け、用意された紅茶に口をつけていた
男が、カツブを皿に戻して、ゆつくりと立ち上がった。

「あらあなたは…。」

見慣れた顔があった。

「やあ、お嬢さん。またお会いできましたな。」

昨晩、櫻子を救つてくれた男。

「まあ、名無しさん！お会いできてうれしいわ！」

男は、少し、よりめいた。

「お嬢さん、名無しはあんまりじや ないですか？」

「お名前を教えてくださいなかつたじやないの。」

「……そうですね。俺が悪かった。」

男は、気を取り直した。

「楓崎蓮一、歳は二十八です。漢字は、睡蓮の蓮に、数字の一で、
蓮一です。ちよつと変わった名前で覚えやすいでしょ？ 楓崎商会
といふ貿易業をしております。」

そして、貴禄のある笑みを見せた。

「昨日は、とんだ災難でしたな、櫻子さん。しかし、お怪我が無
いよつて安心しましたよ。これが、お見舞いではなく、ちよつとし
た贈り物の花になつて、良かつたです。」

そうして、今まで見たことが無いよつな、大きな真紅の薔薇の花
束を、櫻子に渡した。

「まあ、ありがと。」

櫻子の顔が、ぱつ、と明るくなつた。

「欧羅巴のものを真似た香水も、商品として取り扱つていましてね。国内外に原料となる花園をいくつか持つておるのですよ。」

「それで、貴方からは、薔薇の香りがするのね？…どうぞお座りになつて。」

「おや、昨晩の騒ぎの間に、そんな事まで見抜かれていたとは恐れ入つた。やはり、あなたはただの令嬢ではなさそうだ。」

榆崎は、もう一度長いすに腰をかけた。

「昨晩も、無頼漢共に啖呵を切つて乗り込んでいく様は、さすがの私も少々びっくりいたしましたがね。さすがは大佐殿の妹さんだ。」

「ほんと初対面の男性に、面を向かつて言われると、今更ながら恥ずかしくて、櫻子は、耳のあたりを紅く染めた。

「知り合いを通じて、浅草で絡んできたならず者を蹴散らしたお嬢さんが居なさる、というのを聞いて、興味を持ちましてね。一度、会つた見たいと申し上げておいたら、その方が、昨晩の夜会を紹介して下さつた事で、こうしてご縁を頂く事ができたのですよ。若い男性は、花の名前が自分の名前に含まれている事が、条件だとお聞きしましたときには、奇妙な規定だと思いましたが、生まれて初めて、自分の名前に感謝しましたね。幸運でした。」

（どうして、浅草の一件が、噂になつてゐるのかしら？？）

世間は、狭い、と櫻子は思つた。

「ええ、今朝も、父から全くはしたない娘だ、と怒られていましたのよ。どうか、恥ずかしいですから、それ以上は仰らないでください。」

実際の梅造は、かなり面白がつてゐたが。

嘘も方便、という諺もある。

「褒めているのですよ、俺はね。だから、こうして、先手必勝とばかりに、お宅に向つたというわけだ。」

「はあ…。」

話が読めない。

そういえば、彼は何の要件で、この屋敷に来たのだらう。まさか、忘れ物を取りに来たわけでも、あるまいし。

「ですからね、私は、貴方にこうして結婚を申し込みに来たのですよ。」

「は……？」

(は……?)

櫻子は、ぽかんと口を半開きにして固まつた。その様子は、あまり、令嬢には似つかわしくない。

「どなたの……？」

「ですから、俺と、貴方の、です。」

「……。」

「気の強い女は世間には『まんとい』るが、実際に白刃が光るのを前にして、啖呵を切つて乗りめるような氣の座つた女性は、初めて見ましたよ。ますます、貴方が欲しくなりました。」

「……。」

「しかも、まだ日本人には馴染みのないジャズを、一度聴いただけで覚えておられて、おまけに、それは俺のようだ、と仰つた時には、もう、その帰り道には、貴方以外の女性は、俺には霞んで見えてしまつてね。たまらず、『うして足を運んでしまつた、というわけですよ。』

「……。」

「おつと、自分ばかり少し喋りすぎたようだ。櫻子さんは、どう思つたかね？」

尋ねられてわれに返つた。

「櫻子さん？」

「『めんなさい。ちょっとびっくりしてしまつたわ。だつて、榆崎さんとは、昨日、お会いしたばかりだもの。』

「ははは、それもそうですな。しかし、どうやら、俺が一番乗りだつたようで、安心しましたよ。」

「ええ…、昨晩も、あの後で、知り合いかから、このようなはしたない娘に求婚してくださる方なんて、現れない、と嫌味を飛ばされたばかりでしたもの。」

「そんな事、言わせておけばいいことですよ。むしろ、俺は、こうして花束を抱えて、屋敷の門に並ぶ熱心な殿方が増える事を、心配しましたからね。」

「そういえば、父も篩がどいつの、と、似たような事を言つてていたようだ。」

櫻子は、頬に、指をすこし当てる、ちょっと首を傾げた。

さて、これからどうしたものか、といつ風に。

「どうしましょう?」

昨晩、そろそろ婚約者を…といつ話を耳に挟んだと思つたら、今日、既に一名、現れてしまった。

心づもりもなかつたことなので、承諾する気はさらさらないが、お断りしたところで、また新たな男性が屋敷にやつてくるような気がした。

それに、このよつたな自分を、「気に入つた」とこつてやつてくる、よつたな風変わりな若者なのだ。それに、朝一番に駆けつけてくる、行動力もある。

「貴方の気持ちを代弁いたしますと、今は承諾するつもりはないが、すつぱりこの口断るほど、まんざら嫌でもない、と言つた感じですな。」

すばり、心中を言つてられてしまつた。

「私は、先手必勝が信条だが、せつかちではないのでね。どうですか?これからお忙しくなれば、ご一緒にどこかへ出かけませんか?」

思つても見なかつた申し出に、櫻子は驚いた。

慌てて、斎木の方を見る。

「旦那様から、お嬢様に任せると仰つておりました。」

父様は、本当に自由主義者だわ、と思つた。

「私は、今日は午後からは特に何もする事が無いのよ。お断りする理由が思い当たらないわ。そつおつしやるなら、どこか一緒に行つてくださる?」

「ははは、貴方は正直な方だ。もちろんですよ。俺がお誘いしたのだからね。」

もう、車は、用意してあるのだよ、と、榆崎は笑つた。

「『』婦人は、支度に少々、お時間が必要だろ?俺は、ここで紅茶を頂きながら、いくらでもお待ちしているから、準備ができたらまた戻つてくれないか?」

ええ、わかつたわ、と櫻子は、応接室を出て、自室に戻つた。

部屋から出ると、廊下には、しかめ面の桃真がいた。

「あら、兄様、まだ家に居たの?」

「……斎木から、話は聞いた。」

「ちょっと、お出かけしてくるわ。」

「子女が、よく知らぬ男と一緒にいくのは好ましくないが、父様が了承した、という事は身元もしっかりした相手なのだろう。俺は心配はせぬが、気をつけて行つてこいよ。」

「ええ、車を出してくださいから交通はお任せするつもりだけど、そうするわ。」

「気をつけて、の意味が違う、と思つたが、言わなかつた。

「そういうば、兄様も、昨日の一件で、どこもお怪我はなかつたの?」

「あのような斬り合いで負傷しておれば、軍人なぞ務まらん。それより、菊弥には、今度会つたら、お前からも礼を述べておけよ。負傷したものはいずれも軽傷だったが、全員彼が見てくれたんだからな。」

「わかつたわ。せつかく來ていただいたのに、彼にも申し訳なかつたわね。」

「全くだ。来週、彼の両親が帝都を尋ねてくるそつだ。お前も、田代お世話になつたのだから、一度は顔を出しておくのだぞ。」

「そうだ、と桃真は思い出したように、声をあげた。

「お前に返事をするのを忘れていた。来週の終末に浅草に行きたいといつていたな。俺の予定は大丈夫だ。」

十一月は、浅草では酉の市と呼ばれる年中行事があつた。開運招福と、商売繁盛を願う祭りで、江戸時代から続いている。お祭り好きの櫻子は、毎年、この行事を楽しみにしているが、人が多すぎて、一人で行くのはいささか危険なので、毎年、兄についてもらつてている。

「よかつたわ、ありがと。」

「ああ、じゃあ、気をつけてな。」

夕方には返つて来いよ、と言られて、部屋を後にした。

序章（8） 日曜日ノ訪問者（選択肢有り）

「おや、櫻子さん…。」

榆崎は、櫻子の洋装を見て驚いた。

黒を基調としたテーラード・スーツは、襟や、スカートのなど、部分的に、白くなっている。

全体的に直線的なシルエットは、巴里あたりから巻き起こった、最近の流行だという。

「…変かしら？」

「いや、よくお似合いだ。」

「髪は、短い髪のほうが、この服にはよく似合つたかもしぬないわね。今日も、あなたは洋装で着てくださったから、真似てみたのだけれど。」

「あなたは、流行には敏感な性質なんだね。」

この時代、男性は三割程度は洋装をたしなんでいたが、女性はまだまだ百人いて一人くらいの割合しか親しまれていなかつた。

「でも、この格好は、もう少し痩せた女の子が着た方が似合つわね。」

「そんな事ないさ、さあ、もう昼ですから、何処に行くか決める前に、昼飯にでも行きましょうか。」

榆崎の車で、仏蘭西料理を食べに行き、それから帝劇へ行く前に、銀座の喫茶店で時間を潰した。

「この間の夜会といい、あなたは地味好みなんですね。」

紅茶のカップを傾けながら、意外そうに、榆崎が言った。

「私、実は、あまり服は持つていませんから、新しく仕立てていたぐ時は、なるべく質素な服にするようにしてゐるよ。他の人の印象に残つてしまふ服なら、そう何度も着れないでしょう。特に、夜会ではね。」

櫻子は、いたずらっぽく微笑んだ。

「あなただつたら、服どころか、銀座の呉服屋をまるごと買えるでしょうに。」

「私が、稼いだお金ではないもの。」

榆崎は、ほう、と、眉を上げた。

どこの夜会に顔をだしても、家が金持ちな所の娘は、今の流行は何だの、この間新調した着物はどうだと、榆崎には消費する事ばかりしか考えていないように聞こえたので、櫻子の考え方には、少し驚かされた。

「それでお嬢さんは、国語の教師もそれでいらっしゃるのですな。」

「ええ、なるべく身の回りのものは自分で買うようにしたいし、それに、私は、生徒に国語を教えるのが好きなのよ。」

「俺は貧乏でしたから、尋常小学校しか卒業していませんからな。勉強というものも、あまり好きではありませんでした。」

「私は、実を言つて、国語以外はあまり出来なかつたのよ。」

櫻子が、照れ笑いをした。

「家同士の付き合いの長いお家に、大変頭の良い息子さんがいらっしゃつてね。京都から上京されて、私の家から大学に通いなさつたの。その方に、私は勉強を見てもらえたから、女学校を卒業できたようなものなのよ。」

「もしや、昨晩の軍医殿ですか？」

「あら、『存知？』

「直接の知り合いではありません。が、しかし、こういった商売をしていくと、自然とあちこちの夜会に顔を出させていただく機会が増えるので、情報が入つてくるのですよ。」

「私のお話も、一体どこから入つてしまつたのかしらね……。」

櫻子は、浅草の一件が榆崎の耳に入つていた事を思い出し、右手で頬を押さえた。

「いいや、元を辿れば、俺はそのおかげであなたに会うことが出来たんだ。もし、俺が他の夜会に出席していた時に、あなたも出席

していったとしても、俺はあなたが、あなただと、わからなかつたかもしれない。」

あなたが、あなただとわからなかつた。

国語の教師としては、なにやら心につつかえる表現だ。

「あら、昔にあなたとお会いした事があるという事かしら?」

ふふふ、と榆崎は不敵な笑みを浮かべるだけだった。

「私は、あなたをお探ししていたのですよ。」

その笑みが消え、真剣な目つきになつて、櫻子をまっすぐに捉えた。

さすがの櫻子も、ぎくり、とした。

剣道の試合ならまだしも、男性から、強くぎりりと光るような視線を送られるのは、父や兄から叱られた時だけだ。

しかも、このような喫茶店でそうされた経験などない。

怖い、と櫻子は思つた。

「この人だ、と思つた。俺は本気ですよ、櫻子さん。本気であなたを欲しいと思っているのです。」

心に突き刺すような、真摯な口調だった。

このよつな直接的な口説き文句を聞かされたのは、初めての経験だった。

不覚にも、赤面してしまつた。

「女性をときめかせるのがお得意なようね? その手練手管で、一
体、何人の女性を今まで虜になさつたのかしら?」

「そんなことはない、私がこんなに情熱的な言葉を伝えたのは、
あなただけだ。自分でも、びっくりしてしまつた。」

それすらも、演技なのか、あるいは、本気なのか。

「でも、榆崎さんなら、私よりも、もっと美しくてお金持ちのお嬢さんとでも婚約できそうよ。」

「ふう……、さすがは教職に就かれているだけあって、真面目ですな。」

「それに、ご存知の通り、私は教師で、財閥とはあまりかかわり

が無いのよ。もし、『商売の為に、私を利用となさるなら……』

「あなたは、俺が金や人脈目当てで近づいたとでも思つていらっしゃるのか？」

榆崎は、己の自尊心を傷つけられたようだつた。

その瞳が、凍るように冷たくなつた。

「失礼な事を言つてしまつたわ。」

「いや、俺の立場なら、似たような事を考えたかもしれない。しかし、俺は、ゆつくりと事を進めるのは嫌いな性分でね。」

「正直に言うとね、自分が結婚するだなんて考えててもいなかつたもの。」

櫻子が、紅茶のカップを持ち上げて、口に含んだ。

生ぬるいというか、すでに冷たくなつたそれが、この男と一緒に居る時間が長いものになつた事を表していた。

「……それ以前に、まだ、人を好きになつた事がないんですもの。」

この時、櫻子の脳裏には、何故だか神谷の顔が浮かんだ。

そんな、自分に、少し動搖した。

しかし、その事に気がつかなかつたことにして、胸の奥にしまいこんだ。

「…………」

少し、驚いたように、榆崎の瞳が丸くなつた事に、櫻子が気がついた。

榆崎は、この前のようなきらびやかな夜会を、当たり前のようにな開き、華やかな御曹司達に囲まれて育つてゐる女性から、このような台詞を聞くことになるとは思わなかつた。

「だから、恥ずかしい話ですけど、私、こんな歳になつても、恋といつものがどんなものなのか、よくわかつていないので。」

榆崎は、笑わない。

しかし、妙に納得した。

普通ならば、年頃の男女が一人で何処かへ出かけた時、どちらか

が、艶っぽい視線を飛ばしたら、用意、ドン、だ。

自分が今まで相手にしてきた女性達は、そこから駆け引きが始まつた。

すると、女性といつものほは、突然、なんともいえない雰囲気を醸し出し始めるのだ。まるで、花が綻んで、中に閉じ込められていた香りが、外へこぼれ出すように。

しかし、彼女は、まるで、まだ固くて青い薔のままだった。

自分は、ここまで感情をむき出しにして、彼女を欲しているのに、返つてくるものは、こんなにも味気ない。

わざとばぐらかされているのか、と思つていた。

しかし、そりではないらしい事には、ずいぶん早くから気がついてしまつた自分が、悲しい。

もしかすると、彼女は、自分がそれなりの歳の男であることすら、時々忘れているのかも知れない。

その無邪気な笑顔を見るたびに、愛おしく思つたが、同時に憎らしき、とも思つた。

心の芯から、嫉妬にも似た、なんとも例えようのない黒い感情が、

渦を巻いているようだった。

「急にほんやりそれで、どうしたの？」

「ああ、いや…なんでもないさ。」

きっと、まだ彼女は気がつかないだろう。

恋の味を知らないあなたに、これからどんな策を講じよつか、と考えてゐる事を。

「本当に、今日は良い天氣ね。。。」

櫻子は、話題をそらせようと、窓の外を見た。

秋の日差しは柔らかい。

「そうだ、散歩でもしましょつか。まだ、紅葉にはちと早いが。」

「まあ、いい提案ね。…でも、劇場の準備をしてくださつたのではないのかしら?」

「他に行くところが無ければそりするつもりでしたがね。なにぶ

ん、仕事が忙しくて、何処か自然の多い場所で安らぎたかったので、丁度よかつた。」

「どうやら、忙しい間を縫つて、自分を訪れてくれていたらしかった。

「お忙しいのに、来て下さったの？」

「この時勢に仕事が多いのは、良い事ですよ。では、外へ出ましょうか。俺も、室内より外をぶらぶらしたい気持ちになつていたのでね。丁度よかつた。」

「じゃあ、行きましょう。」

「ああ、ゆうべ。」

そうして、一人はそういうことになつた。

もみじは、まだ朱色のものが多くて、真紅ではない。
もう少し、寒くなれば、深く色づくだろう。

それでも、櫻子を感激させるには、十分だった。

「あと一週間後くらいに、京に行けば、きっと最高でしょうね。」

「京都がお好きなのですか？」

「父の祖父の実家は、もともとは京都だつたのよ。だから、本当に古いお付き合いをさせて頂いているお家は、京に多いから、今でも父に連れられて、よくうちの別荘に行くのよ。特に春は必ず。」

「櫻ですか？」

「そうよ。京の櫻でなければ、観た気がしない、といって、父が言つた。生まれた時から帝都に住んでいたのに、血が騒ぐのかしらねえ。」

「自分は、もとは関東の生まれですが、そこから神戸に行つて、大阪も少しは居ました。大きくなつてから、神戸で会社を興して、拠点を帝都に移しました。だから、京の櫻も知っていますよ。」

なるほど、だから、関西の商人が、まるで無理やり標準語になおしたかのような独特の話し方をするのか、と櫻子は思った。

榆崎は、紅葉の葉を数枚取ると、それをじっくりと手を凝らして眺めた。

まるで、物思いに耽るかのようだ。

「きれいでしょう？ 京の櫻は。」

「あ？ ああ……」

上の空だった榆崎は、声をかけられたことに驚いて、うなづいた。いつの間にか、日差しは西へ傾いて、周囲は葉と同じ朱色に染まっていた。

「長い事、喫茶店で時間を潰してしまったよつだ、櫻子さん。帝劇を見たいと仰っていたが、それでは帰宅が夜になる。」

兄にも夕方には戻ると言つてしまつた。

「どうだ、来週も一緒に何処かへ出かけませんかな？」

「来週も？」

きっと、この人は、また忙しい間を縫つて、私に会いに来てくれるつもりだろう。

櫻子は少し考えた。

来週は……

「一緒に帝劇に行きたいわ。」

【榆崎蓮一】編へ
【斎木秋人】編へ

「斎木にフルツを習わなければ。」

【京極菊弥】編へ
【一階堂桃真】

「菊弥さんの家族に挨拶をしなければ」

「兄と浅草へ行く予定なの。」

編へ

【榆崎蓮一】編（1）戸惑ヒ

「一緒に帝劇に行きたいわ。」

櫻子は、少し顔を上げて、蓮一を見た。

「でも、その後、一緒に浅草にも行ってくださる？」

後で、兄に謝る事を忘れてはいけない。どうせ、乗り気ではなかったのだから、自分と付き添わずにすんで、喜ぶだろう。

「浅草ですか？」

「西の市に行きたいの。でも、一人では危ないって言うから、兄様と一緒に来てくれる様にお願いしていたの。代わりに一緒に、行つてくださると嬉しいわ。」

榆崎は、少し戸惑っている。

「あ、でも、お仕事が忙しいのよね？そんなに長く一緒に居ていただいたら、悪いかしら。」

やつぱり、浅草は兄様に、と櫻子が考えたときだった。
突然、榆崎に腕を引かれた。

咄嗟の出来事に、逆らえず、櫻子は榆崎の胸に倒れこむ。
その胸からは、眩暈のするような、あのオード・トワレの香りがした。

今日、彼が持ってきた本物の生花よりも、深い深い真紅の薔薇の匂い。

「ちよっと、榆崎さんっ？」

驚いた櫻子は、声が少し裏返っている。

「…俺は、あんたが好きだと言つただろ？…」

耳元で、低くて艶のある声が囁いた。
ゾクリ、と体の心が震えた。

「そのおれを兄貴代わりにする気がかい？」

「離して！」

櫻子は、榆崎の胸を突つ撥ねた。

しかし、その逞しい胸は、びくともしなかった。

どうして、こんな事をされているのか、櫻子にはまだ理解できない。

「駄目なら、いいの。私は気にしないから…………っ？！」

何が起きたか理解する事に、時間がかかった。

すつ、と榆崎の顔が近づいてきたかと思うと、そのままぶつかりそうになつた。

ぎゅつ、と櫻子が口を開じると、自分口元に何かが触れた。

それが、榆崎の唇だと気がついた時、櫻子はどうしてもいかわからなくなつた。

自分の下唇を何度も、何度も吸つている。

「ん……！」

その執拗さから逃れようと、櫻子が顔を上へそらそらとすると、その拍子に、榆崎は自分の顔の角度を変えて、己の舌を櫻子へ潜り込ませて來た。

結果的に、より深く、榆崎と唇を絡める事になってしまった。

口内を蹂躪される、その生々しい行為に、櫻子は戦慄した。

このような至近距離で男性と接した事は、今だ経験した事がない。榆崎本来の体臭は、彼が纏っている香りよりも、官能的だった。きつと彼自身は、気がついていないだろ？。

しかし、少なくとも櫻子には、この野生的で、荒々しい匂いを、薔薇の香りで包み込む事で隠しているように思えた。

齧える櫻子は、恐怖から顔を離そうとするが、榆崎はその度に追いかけてくる。

「ん……あなたが悪いんだ。そんなにつれない事をするから。」

熱情に支配されている榆崎は、櫻子が今まで聞いた事のないようなどろけた甘い声で、彼女に囁く。

頬を手の平で固定されて、より深く繋がる位置へ、顔の角度を変えられた。

櫻子には、もう抵抗できる状態ではなくつてしまつた。

唇だけではなくて、魂までもが抜き取られて、くもろ糸に絡め取られてしまつたような感覚に陥つた。

誰かに、見られているかもしれないとか、余計な何かを考えようとしても、すぐに、頭の中を乱されてしまう。

「好きだ……あなたが……。」

「うわ」とのよに、呟く。

何度も送つても、彼女の元まで届けられなかつたその思いを吹き込むかのように、何度も角度を変えて、唇を吸つた。

最後に、彼女の顎の後ろまで吸い、そこでようやく、名残惜しそうに顔を離した。

濃厚すぎる榆崎の行為に、櫻子の耳元や頬は火照つてしまつていた。

それに気がついた榆崎は、優越感に眩暈がしそうになり、彼女の顔から手を離して、それを腰にまわした。

そして、うなじや首筋についばむような軽い口づけをして、ゆつくりと、顔の肩に埋めた。

櫻子の匂いを榆崎も吸い込んで、それからうつとりして息を吐いた。

「はあ……。」

嵐の後のような静けさによつて、櫻子は、意識を取り戻した。

「酷い人……。」

奪われていた声を取り戻したかのよに、櫻子が呟いた。

「でも、これで、俺の気持ちはあなたに伝わつたろう?」

「……あなたが、野蛮な人だという事も、よくわかつたわ。」

高鳴る心臓が静まつてくると、逆に怒りが込みあがつてきた。

「私は、あなたなんて嫌いよ!」

櫻子は、榆崎の腕を振り払つて、逃れた。

「全部が、全部、あなたの思い通りになる女人の人だと思つのは、大きな間違いだわ。」

葵が言つていたように、この男は、相当女性からもてるのだろう。

「これだけ無体な事をされながら、完全には嫌い貫けない自分がいる。浅草で、自分達をからかつた男達にしたような扱いを、彼にはする」ことが出来ない。

もちろん、それは、夜会の時に命を救われた事から、彼が根っから悪人ではない事を知っているからである。

しかし、自分がされた蛮行を、櫻子は受け入れる事は到底出来なかつた。

「あなたは、最初にお会いした時に、あなたの魅力の虜にならなかつた私に執着しているだけなのよ。私が、あなたを好きになれば、それで終いにするつもりでしょ?」

「ふふ……、もし、それが本当であったとしても、それが何だといつのですか?」

「私は、あなたを好きではありません、と言つていいのです!」

櫻子が声をあげた。

「まあまあ、そんな可愛い顔をしなさんな。
からかわれている。

「今にも、噛みつかんばかりだな。俺は女に噛みつかれるのは、闇の中だけで十分だ。」

冷たく榆崎が笑う。

一代で富豪にまで上り詰めた男だ。まだまだ世間知らずの女が相手にするには手ごわすぎた。

きっと、榆崎には、子犬にでも吠え立てられているように映るのだろう。

あんまりだ。

「来週のお約束もなかつたことにします。もう、私に近づかないで!」

榆崎は、精悍な顔つきを引き締めて真面目な顔をした。

そして、抗う櫻子をなんなくもう一度抱き寄せて、深く口づけた。しかし、その行為には、先ほどのような凶暴さはなかつた。優しい、慈しむように触れる。

その違いに、櫻子は驚いた。

「……震えなくてもいい。」

顔を離した榆崎は、もう一度櫻子を抱きしめた。

くつつきすぎて、榆崎の心臓音が櫻子にも伝わってくる。

「震えていなんかないわ。」

それは、嘘である事は、抱きしめている榆崎にはわかってしまう

事だつただろう。

「大丈夫さ、そんなに怖がらなくても、あなたに危害は加えない。

「……加えたじゃないの。」

「それは、あなたがあんまりにも憎らしい事を言つからだ。逢引の約束をしたがつてている相手を自分の兄貴代わりに使おうとするなんてあんまりだ。俺じやなくとも、怒る。」

考えてみれば、配慮に欠けていた。

榆崎を焼きつけてしまったのは、自分である。

でも、謝りたくは無い。

その代わりに、少し戸惑つたよつて、上目遣いで榆崎を見た。

「はあ……。」

もう一度、榆崎は、櫻子を抱き寄せた。

「本当に、あなたは、憎らしい人だ。俺にとつては。」

「できれば、このまま連れて返つてお楽しみ、と行きたいといつて
だが……。」

「下品!」

全てを言い終わらないうちに、櫻子は、榆崎を突き飛ばした。

「痛つ……全く、財閥令嬢ともあうつ方がはしたない事をいたしますな。」

「あなたが、そんな事ばかりするから悪いんでしょう?」

「いいでしよう。どうせ、あなたは俺のものになるんです。それまで待つ事にしましよう。好機を逃すこととは嫌いだが、せつ
かちな性分ではないのでね。」

十分せつかちだ。自覚が無いだけだ、と櫻子は思った。

「もう、帰りましょう、日が暮れますぞ。」

飄々と、榆崎が言ひ。

櫻子は、おとなしく榆崎の車に乗つたが、家の前に着くまで、むすつとした顔を保つて、彼とは一言も話さないようにした。

家の門につくと、櫻子は「もう来ないで」と念を押したが、榆崎は、ちらりと受け流して、「また来る」と言ひて、運転手に命じて車を出して去つてしまつた。

櫻子は、榆崎が去つて見えなくなると、急に、先ほどの感覚が蘇つた。

抗えない力、熱を帯びた吐息、榆崎の体温。

恐怖にもにた冷たい感情と、火照るような甘美な情熱の両方に絡みとられるようだつた。

自分の何処かが、壊されてしまつたような気がした。

「お帰りなさい、お嬢様。」

扉の前で悶々としていると、それが急に開いた。

「どうかされたのですか？」

斎木が訝しがる。

「なんでもないわ、斎木。ただいま。」

自分の動搖を悟られないように隠すだけで精一杯だ。

斎木の目は何でも見透かしているように思えて、心が震えた。

「どうでしたか、榆崎様とは？」

「そうね、昼食をご馳走していただいたわ。斎木、私の部屋に、紅茶とケーキの余りを持ってきてくれる？今朝、私が焼いたやつよ。

」

「はあ…わかりました。しかし、夕食前ですよ。」

「夕食も食べるわ。お願ひね？」

無性に、紅茶と甘いものが食べたくなつた。

あの男とは正反対の、紅茶の高貴な香りを楽しみたかったし、甘い食べ物で、鬱憤を吹き飛ばしたかった。

「熱いダージリンにして頂戴。ミルクもお願ひね。」

きっと、紅茶が、今日自分の身に起こった全てを清めて、何も無かつた事にしてくれるに違いない。

櫻子は、そう考えながら、自室へ戻る為に階段を上がった。

【榆崎蓮一】編(2) 煩惱一ツ

一方、車の中の榆崎は、あれだけ無下に扱われながらも、何処無くうれしそうに、薄い笑みを浮かべていた。

広くなった車内で、足を組み、ゆつたりと深く腰をかけている。

「…………気持ち悪いです、榆崎さん。」

運転手の新堂が、視線を正面に向けたまま、自分の主に向かつていった。

彼は、榆崎より一年下の付き人だった。運転手、秘書などの仕事を兼任している。

「正直びっくりしましたよ。あなた、ああいう人が好みだつたんですね。」

「どういう意味だ？」

「私はてっきり、あなたは熟女好みだと思っていましたから。」

榆崎は、すり落ちそうになつた。

「どうしてそんななんだ。」

「夜会でも、いつも金持ちの奥方様に囲まれているじゃありますせんか。あなたもまんざらでもなさそうですし。」

「おいおい、社交の場だぞ。愛想を振りまかないでどうする。」

体、どうやつたら、そんな豪快な見込み違いができるんだ。」

「おや、違うのですか？」

「婦人やお嬢様から誘いを受ける事は、多々あるわ。しかしながら今まで社交上の範囲内だ。」

「誰かに、本気になつた事は？」

「ないさ。深入りしすぎて怪我でもしたら大変だ。俺が社交場に出るのは仕事の交友関係を深める為さ。逆に損を負つては意味が無いだろう。」

確かに、金と女のもつれば、身の破産を生む。

どこぞの誰が不倫をしたばかりに、身を破滅させたとか、そん

な話はいくらでも転がっている。

しかし、だからといって、つれなくしうさぎの毛、高飛車だとか、生意気に映つてしまつ。

つまり、自分のような成り上がりものは、つかず離れずの安全地帯で、周りの人間と関わつていいくのが都合が良かつた。

「まあ、そのあなたがここまで一階堂のお嬢様にご執心とはね。

「可愛い人だらう？」

「あんなねんね、私の好みじやありません。」

「べもない。

「しかし、盛りのついた犬でもあるまいし。震えてましたよ、櫻子さん。」

「……おまえ、のぞいたな？」

榆崎が、眉を上げた。

「珍しく人気がなかたつとはい、公園のど真ん中でがつついでいる人に、羞恥心なんてもん、ありはしませんでしょう？」

榆崎は、しつと無視して受け流す。

「恋をした事がない……か、知らない分、その無邪氣さが返つて毒ですね。」

「おまえ、喫茶店にもいたのか。」

「珈琲を頂いていたんですよ。」

「あきれたやつだ。」

榆崎は、崩れて額にかかった前髪を後ろへなでつけた。

「彼女、このままだとあなたを門前払いしますよ。あんなに怖がらせて。ちょっとせつかちが過ぎましたね。榆崎さんらしくもない。」

「あのお嬢さんがあんまりつれない事をするんでね。わからせてやつたのさ。」

そうしなければ、淡い下心を持つて近づいてくる男共に、また彼女は無邪気に接するだらう。

自分が居ない間に、他のやつに何をされるか、わかつたもんじや

ない。

「そもそも、あの気の強いお嬢さんのことだ、おまえは震えるとは言つたが、慣れない事をされたんで、びっくりしただけさ。」「確かに、深窓の令嬢とは少し違う方ですね。」

「そうだろう。」

「つまり、半分は衝動的で、半分は計算ずくだったといつわけですか?」

「そういうことになるな。」

「怖い人だ。」

「怖いのは新堂の方さ。覗き趣味があつたなんてね。俺は安心して女性も口説けない。」

新堂は、榆崎の皮肉を笑い飛ばした。

「無頼漢に、一度も啖呵を切つたお嬢さんの顔を見たかったのは事実ですよ。」

浅草と、夜会の夜だ。

「もう一つは、榆崎さんの耳に入れておきたいことが急にできまして。」

「なんだ?」

「今朝、衆議院の議員殿が、一人亡くなられたそうですよ。日本刀じやなくて、毒殺だったので、まだ自殺か他殺かわからないですが、おそらく他殺の見込みです。」

「ふむ。」

「夜会の晩に、二階堂家に襲撃來た者とつながりがあるのかはわかりませんが、その議員は企業の経営活動の推進の為に、いろいろな法整備に尽力をつくしていた方だったので、よもや、と思いましてね。」

「確かに、襲撃者は社会主義や無政府運動に関わるものとの仕業かもしれないという話だったな。どこの国では、財産は盜奪である、と表現した者もいたそうだ。」

それならば、まさに資本主義の恩恵を受けている自分は、彼らに

とつては富の略奪者だ。

あの日の襲撃者の狙いは、本当は何名だったのか知る由もないが、もし、彼らの計画が失敗に終わっていたのだとすれば、それを妨害した櫻子と榆崎は恨まれているかも知れない。

報復される可能性があるなら、顔も知られている分、危険だ。

「全く、物騒な世の中になつたもんだ。」

「物価もこここの所、不安定ですしね。」

「物価は、どの時代も不安定なものさ。どんな時でも、知恵を絞れば、しこたま儲ける事はできるぞ。」

榆崎は、自分の頭を指差した。

「話を元に戻しますとね、榆崎さんとお嬢さんが一緒にいるなんて、まとめて始末したいものには都合のいい状況ですから。まだ危険か安全かがはつきりするまでは、十分に気をつけてくださいね。」

「ああ、わかつた。」

そう言つと、榆崎は、軽く目を閉じた。

「ちよつと眠る。仕事で、今週は殆ど寝ていなからな。」

新堂は、自分の仕事の代わりはたくさんいるが、榆崎の代わりができるものがいない事を知つていて。間近で仕事ぶりを見ている分、疲れが溜まるのも、無理は無い、と思った。

「悪いが、着いたら起こしてくれないか?」

「新吉原ですか?」

うとうとと、まどろみかけた榆崎は、ぱつちらと目を開いた。

「なんで、そうなる?」

「違うのですか?一階堂のお嬢さんに無体にされた分、妓^{おんな}にでも、優しくしてもらつて自信を取り戻されでは如何かと。」

「知らぬ人が聞けば、誤解されそうな口ぶりだ。俺は、昼は仕事、夜はどこぞの夜会でくたくただ。」

「ですから、吉原でその疲れを取つてきてはいかがですか。」

それとも、遊女はお嫌いですか、と新堂は声をかけた。

「俺は、嫌だ。遊んで、うつかり、子供でもできたらどうする

んだ？」

「用心深いですね。」

「それにだ、吉原は、一人の馴染みしか作れないんだろう？」

京の島原と違つて、吉原では、男は馴染みの女が出来ると、他の遊女へは登楼できない不文律がある。つづかり浮氣をすれば、女の報復を受けると聞いた。

「どうせ通うなら、島原がいいや。京は、女余りだから、どこも愛想がいい。」

といふのは、榆崎の方便で、本当は妓遊びには興味が無いだけだつた。

ちなみに、女余りというのは、単に、人口比が異なるからだ。京の人口は僧と女性の数が多く、江戸は男性が多いので、自然とそうなる。

榆崎は、自分の商売に良い影響を『えそな夜会には顔を出すが、一夜の夢を買う時間があるなら、もつと己の商売を大きくして、今以上に力と権力を持てる人間になりたかった。

それを目指して、今まで突っ走つて來たのだ。

その夢ももうすぐ叶う。

立ち止まつている暇は、無いのだ。

「聞いてもいいですか、榆崎さん。」

「なんだ、新堂？」

「どうして、あのお嬢さんにそこまで執着されているんです？」

「今以上に、しこたま儲ける為さ。櫻子さんは、自分は父親の仕事に何も関わつていないと言つていたが、二階堂家の名前はこの日本で知らぬものはないだろ？にも関わらず、この間の夜会に出席していた御曹司どもは、生まれたときからぬるま湯に浸かっているせいで、野心のかけらもない。」

そんな軟弱者共に、みすみす奪われるのを黙つてみている程、自分には被虐趣味はない。

「確かに、金と権力を手に入れたものが、次に手に入れたがるの

は家格ですが、梅造氏は実力主義者ですね。」

長女の撫子嬢も、たまたま若手の中央官僚の妻になつたと聞いた

が、それも本当は恋愛結婚なのだとか。

「近頃の富豪は娘を持てば、官僚や華族に嫁がせて血縁関係を持ちたがりますが、梅造氏はそういう事は重要視されていないようでしたね。」

「貧しいものや、素性の良くわからぬものも、気に入れば取り立てて、傍に置くという噂だ。」

あの、神谷藤隆のよう。

「だから、これは、俺にとつては、願つてもいられない機会なんだ。俺は金はそれなりにはあるが、それだけでは、資産家の令嬢にとつては魅力的な結婚相手にはなりえんからな。」

「ですから、一階堂のお嬢さんを手玉に取る為に、回りくどい事をしていらっしゃるんですね。」

食えない人だ、と榆崎はにやりと歯を見せて笑つた。

「しかし、最近の榆崎さんは、特にお忙しかつたでしょう。たまには息抜きも必要だ。」

「だから、今日、いつしてもお嬢さんと食事に行つただろう？ 来週の約束も取り付けた。」

「はあ……。」

傍目には、思いつきり嫌われてはいやしなかつたか？

「とにかく、俺は寝る。会社に着いたら、起こしてくれ。」

「まだ働く気ですか、あなたは？」

「急に不安な案件が思い浮かんだ。ちょっと調べて、すぐに自宅に戻るひ。」

そうして、再びまどろみ始めた。

榆崎は、そこでとても幸福な夢を見た。

しかし、新堂に起こされると、その夢の内容をすっかり忘れていた。

「先生、どうしはつたの？」

若い尼僧に覗き込まれて、櫻子は我に返つた。

女学校で、今日の授業を終えた櫻子は、尼寺に居た。

仕事の後、時間を見つけては、ここへ書を習いに来ていた。国語の教師のくせに、書道だけは、どうしてもなかなか上達できない。

しかし、近場の教室へ通えば、学校の生徒と出くわすかも知れない。そこで、わざわざ、少し離れたこの尼寺まで通つては、書の練習に励んでいた。

「いつまでそうして、墨をすらはるおつもり？」

小柄な尼僧は、まだ年は三十ぐらい。昔は、京都に住んでいたらしく、言葉もそのままだった。

「妙月先生、ごめんなさい。ちょっと、ひっかりしていたわ。」

櫻子は、照れ隠しに、最後に、硯で墨を一、二すつた。

筆に適度に墨を吸わせて、半紙の上に滑らせる。

最近は、ずっと漢詩を題材にして練習している。

「李賀の秋来やなんて、また渋くて暗い詩を選びはつたなあ。」

中唐の詩人である。

「あの芥川龍之介先生もお好きらしいけど、うちば、この人の詩はちょっと怖くなつてしまふくらいの印象がありますのや。」

研ぎ澄まされた、才能に畏怖する感じだ。

さすが、鬼才と称されたお人やな、と妙月が言った。

確かに、彼の生きた時代の風潮を突き抜けて表現するような印象を、櫻子も持つた。

「でも、書道の先生としては、ちょっと丸はつけられへんな。」

線に迷いがある、と妙月が言った。

「心が動搖するような感じやね。」

「そうかしら?」

「ええ。口では何も言わんでも、筆は教えてくれますのや。」
もう一度、やり直して書こうと、新しい紙を用意したが、妙月に遮られた。

「今日の櫻ちゃんは、ちょっと変やで?」

澄んだ瞳は、全てを見透かしているようだった。

「どうしたのや、何かあつたん?」

櫻子は、困った顔をした。

「やっぱり、何かあつたんやね。」

「実は…」

妙月は、人の異変には良く気がつく人だったが、相手から心を開こうとしない限り、無理に踏み入つたりはしない人だった。
だから、櫻子の方から、先週あつた出来事を全て話した。
夜会、そして、楡崎の事、全てを。

「そう、大変やつたなあ、櫻子ちゃん。」

妙月は、櫻子を包むように抱きしめた。

袈裟からは、わずかに沈香の香りがした。

「今日は、練習は終いにして、お抹茶でも飲もう。丁度今朝、え
え和菓子を頃いたんや。」

そして、につこり笑って、準備を始めた。

出された菓子は、扇型にきれいな色がつけてあって、中にはこし
あんが入っていた。

「本当に美味しい…。」

「そうや。お茶もやで。」

すすめられて、口をつけないと、ほろ苦い甘みが口内に広がった。

「本当…。」

息をついた櫻子を、妙月はにこにこと見つめていた。

気持ちが和んだところで、縁側を見た。

「ここ庵にも紅葉が植えられているのね。」

「そうや、今はまだ朱色やけど、来週ころには真紅になるさかい、

楽しみにしてるんよ。」

「……私、来週どうしたらいいのかしら。」

「どうせ、その強引なお人は、断つても、また別の日に来なさるんやろ？それやつたら、お会いしてみたらどう？それでも、嫌やつたら、次から会わんかったらよろしいのや。」

「簡単に言いなさるのね、妙月様は……。」

「悩んでも、体の毒になるだけや。」

櫻子は苦笑した。

「煩惱の数だけ、人は強くなれるんですけど。死んだら煩わしいも何も在りはしません。悩めるだけ幸せや、と気楽に構えとき。」

妙月は、抹茶をすすつた。

小柄な人だが、櫻子以上にしつかりした人だと思った。

「でも、聞いてもらえるだけでも、随分楽になつたわ。」

「うちかて、びっくりしたで。最初に見たときから、櫻ちゃんの顔が暗かつたさかい。」

「そんなに……？」

「ええ。そして、筆を持つたら、いつもの勢いもなくて何かよわよわしいし。声かけたら深刻な顔をするから、てっきり何か悪い病氣にでも罹つたんかと思つたんよ。きっと、家には話せる人がいなかつたんやろ？氣鬱になる前に、こうやって、美味しいものでも食べながら、全部吐いてしまえばいいんや。」

確かに、家に帰つても、誰にも相談できなかつたのは、事実だ。

今、働いている女中には、年が近くて親しい人もいなし。

斎木に話したところで、あの鉄面皮は微動だにしそうにないし、兄は怒つて榆崎を切りつけそうだ。

そして、父は、面白がって、榆崎を屋敷に招きかねない。

あの俺様で、豪胆で、飄々とした男は、父が好感を持ちそうな人物だと思う。うつかり気に入つて、屋敷を出入りするようになつては、それこそ逃げ場が無い。

梅造と榆崎が、仲良く日本酒を酌み交わしている姿が、ありありと想像できてしまう。ああ、嫌だ。

「そうや、櫻子ちゃん。今年の大晦日は忙しいの？」

「いえ、年末年始は父もお休みするよ」としてるから、特に何もないわ。」

「それやつたら、うちの庵で、一緒に年越蕎麦でも食べへん？それとも、家族の方と一緒に過ごわはる？」

「私が来ていいの？」

「もちろんや。ほかの尼僧も喜ばねるよ。」

「じゃあ、お邪魔したいわ。」

櫻子は、妙月と約束をして、そのまま櫻子の続きをせざて、帰宅した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7262y/>

誰ガ為ニ、華ハ薰ル

2011年11月23日18時47分発行